
月からの警告

神崎 翔紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月からの警告

【Nコード】

N4713J

【作者名】

神崎 翔紀

【あらすじ】

烏森の勤めも無事に終わり、就寝に入る良守。

だが、ある日から続けて視た『夢』が、きっかけに烏森を舞台に良守を中心とした奇怪な事件へと巻き込まれてしまう。

第㉑夜―不思議な夢―（前書き）

最後まで、お付き合いして頂ければ嬉しいです。

第壹夜―不思議な夢―

明るい月明かりの下で誰かの泣いている声が聴こえる。

その声を耳にした途端に、漆黒の着物を召した少年が静かに呟く。
先程、少年が聴いた声は、まだ声変わりを迎えていない男の子供の
声……………の様なのだが、泣き声を頼りに歩き続けていてい
るのも関わらず子供の姿が見えない。

本当に声は、近くまで聴こえているはずなのに…………。

それに、聞こえてくる“声”が耳に焼き付き付いてしまったのか、
声が離れてくれない。

ただ“声”を聴いただけなのに。

酷く心に突き刺さる想いになってしまふのは何故だろうか。

聴いている此方が哀しくなってしまう様な気がした。

もう一度、周りを見渡せば、相変わらず変化の無い世界。

明るいと言っても目に映り込むものは、周りを包み込む白い霧と月
の存在だけで何も見えない。

ザッ、ザッ、ザッ…………――

子供の姿も見えず周りの景色も変わらない場所に、いい加減飽きて
きた少年は、それまで進めていた足を止める。

「あれ？……………そもそも、なんで、こんな所にいるんだろう」

『今更かよ！』と、何処からかツツコミが聴こえてきそだが、ここ
には少年の夜の相棒を果たす妖犬・斑尾の姿がない。

それに幼い頃より同じ家業を勤める幼なじみの時音も妖犬・白尾の
姿も最近、夜行から派遣された志々尾の姿もない。

そもそも、自分は妖を滅し、烏森から家に帰り、着替えてから布団の中に潜ったはず。

自分を見れば、いつものパジャマ姿ではなく、
烏森へ赴く為の“黒の装束”姿。

「――何だよ！ここは！？」

一人、頭を抱え混乱とパニックに落ち入りながら騒ぐこと約5分。
悩むのを早々に放棄してしまった様だ。

やっぱり、自分は考えるより先に身体を動かしていく事が一番自然な行動だろうと結論付けたのだった。

けど、この月の光しか届かない寂しい場所独り泣いている子供を早く安心させたいと思っているのは、紛れもない良守の自身の心であった。

もう、誰かが泣いていたり、傷ついた姿を見たくないと思ったのは、俺が……………大切なヒトに怪我をさせてしまった。

だから、誰も傷付く事がない様に『烏森を永遠に封印する』と決意したんだ。

今、一番、大切に思っている大切な……………

「大切な人……………誰が？」

言葉に変えようとしていた人物の名前が突然、分からなくなってしまう。

今まで本当に、自分にとって大切な人だった筈なのに。

……………誰？

『――良守！良守！良守！』

誰かが、俺の名前を呼ぶ声が何処からか聴こえて来る。

あの優しい声の人の持ち主が、俺が思う『大切な人』なのだろうか？

『———良守!』

もう一度、名前を呼ばれば周りの風景が少しずつ歪み、全てが静かに消えていく。

そう、泣き声さえも……小さ……く……



「うう………。起きたから、身体を揺らさないでくれえ」

肩を揺さぶられ、ゆっくりと布団から上半身を起こす。

寝惚けた瞳をゆっくりと開けば、まだ覚醒していないのか、視界がボヤけている。

かろうじて、目の前に居る人物が父・修史の姿だと分かる。

それにしても、今までこんなふうに起される事がなかった為、珍しい事だと思ふ半面、あれは夢だったんだと頭の片隅で冷静に理解していた自分に少し驚く。

「おはよう、父さん？また、繁爺と時婆が喧嘩でも始めたのか？」

毎朝恒例の事とはいえ、どうして、あの二人は近所迷惑を考えず、

朝からテンションが無駄に高いのだろうか。

止めに入れば、とばかりを買ってしまうので、頼まれても止めに入るのは遠慮したいのが良守の本音だが、何時まで経っても返事が返ってこない事に不審に思う。

もう、十分、目が覚めている筈なのに、なかなか視界は晴れてきれない。

「……父さん？」

「良守。何処か具合が悪いのかい」

「えっ？……………どうして？」

「涙を流して……………」

そう言って、良守の目から溢れた涙の雫を修史の指が優しく拭き取る。

その事で、漸く晴れない視界の原因を知り、涙を流していた事に気付かされる。

「大丈夫なの、良守？今日、学校お休みした方がいいんじゃない？最近、数が増えてきてるって言っていたし……………はっ！まさか怪我！！」

「違うよ、父さん。大丈夫、怪我は無いから」

少々、オーバーなりアクションに驚くと同時に嬉しい気持ちで胸が温かくなる。

確かに妖の数は増えてきたが、相手は雑魚ばかりなので問題というわけでも無い。

「大丈夫、心配いらなから。ただ、ちょっと夢見が悪かったただけだと思うからさ」

「夢見？……どんな夢を？」

「それが、月が……」

急に黙り込んでしまう良守に、また不安が胸の中に広がりを見せる。

「良守？」

眉間に皺を作り腕を組み悩む彼の答えは“覚えてない”と言う実にシンプルなものだった。

そんな良守の反応に少しだけ安心したのだろうか。

修史は早く着替えて、ご飯を食べて来なさいと言い残し部屋から去って行く。

修史の遠ざかる足音を聞きながらも、良く覚えていない夢の事を思い出そうとするのだが、やっぱり綺麗に忘れているようだ。

こんな時に、時音のような頭を持っていればと思うのだが……。

いつまでも引きずる考えを振りきるように、閉めきったままのカーテンを開ける。

気持ち良い朝日と風の流れが、少しだけ良守の心を軽くした。

その後、急いで布団を片付け、制服に腕を通し終ると、皆が待つ居間へと行くのであった。

… … … …

居間に着いた途端、繁守の小言が良守の耳に入る。

だが、それは毎朝の挨拶代わりの様なもので大して気にも止めない。その証拠に心配性の修史は、皆のお茶碗に、ご飯盛って準備を整えつつある。

目の前に置かれているコーヒー牛乳を片手に持ちながら、朝食を頂く。

その間も、繁守の小言は続いているようだが、最早、良守は聞いていない。

そうしている内に、食事を終えた利守と良守は、一度、自室に行き鞆を手に戻って来る。

「じゃあ、利守。俺、先に行くな」

「うん。行ってらっしゃい、良兄」

「行ってらっしゃい」

片付けをする手を一度、休め、修史が笑顔で話す。

「気をつけて、行くんじゃないぞ」

食後のお茶を味わいながら繁守も、良守の後ろ姿を見送る。

そう、いつもの時間が過ぎるだけだと思っていた。

あの「夢」が、何を意味するのか知るよしもなく。

第壱夜―不思議な夢―（後書き）

読んでくださり、有り難うございました。
少しでも、面白いと思って頂けたら、嬉しいです。

第貳夜―絡み寄る闇―

「行って来きます」

丁度、声を合わせる様に隣の門から出て来た人物は、幼なじみの時音の姿。

「おは――」

「良守！雪村なんとかと口を聞くではないと何度言えば、解るんじゃない！」

時音に挨拶を交そうとした良守を見付け、慌てて墨村家から出てくる繁守と。

「時音！墨村の者と馴れ馴れしくせず、早く、学校に行きなさい。こんなオマケ一族と話す時間が勿体無い事です」

墨村家と雪村家を区切る塀の上に立ち、繁守と良守を手持ちの扇子で指しながら話す。

「オマケとは、失礼な！この老いぼれめ！！」

「何ですって！！」

また、朝の喧嘩の続きが始まりそうな不穏な空気が漂う。

そんな2人から逃げる様に急いで学校へと行く良守と時音の姿があった。

… … … … …
二人の姿が見えなくなった頃に、良守と時音は走るのを止め、ゆっくりと歩き出す。

「本当に、よく毎日続くよな」

「そう言うアンタも付いて来るな」

そう言いながら、時音の歩くペースが少しだけ速まる。

「あ、ちょっと待て！仕方ないだろう。学校が同じ方向なんだから」

「だからって、付いて来るな！」

せっかく歩いての登校が、全力で走る羽目になってしまい……………
……………学校行き着く頃には、息を切らした2人が目撃されたのだった。

… … … … …
やっとの事で息を落ち着かせ、それぞれが自分達の教室へと行き、

数時間が経過した。

時音は次の授業に使う為の教科書を机の上に準備をしながら、親友の、まどかと雑誌を見ながら話していた。

一方、良守は、例の如く式神を使い授業をサボり、学校の屋上に登り昼寝を楽しんでいた。

勿論、騒音防止の結果は忘れる事なく欠かさずに張る。

結界を張り終わり、いよいよ昼寝をしようと腰掛けた時だった。

———ばさっ

良守の前に鳥形で尾が長い式神が良守の周りを飛び回り、差し出す指先に大人しく翼を休める。

「……………なんだ？」

不思議に思い、目の前の式神に反対の手で触ろうとした途端、式神が弾け、一つの文が現れる。

もちろん、文の差し宛て人は不明。

裏を返せば見た事のない印が刻まれていた。

そして文には……………

『もう、少しだから』

とだけ記されていた。

余りの気味の悪さに慌て飛び起き、すぐに辺りを睨みつける様に神経を集中させるが結局、妖の気配も怪しい気配も見つけ出す事は出来なかった。

送られてきた文に寒気を覚えてた良守は、文を握り潰すと、結界を使って消した。

その後も、屋上で寝する気が失せてしまい、午後からは、教室で寝

る事に。

勿論、式神の事は誰にも相談する事なく。

良守にとって一番、心配を懸けたくない大切な人達が近くにいれば尚更の判断であり、まだ、何も起きて無いのなら事を大きくする必要もないと………決めると、昼寝に入ってしまった。…

… … … … …

同時刻、時音達も妙な気配を察知し探りを入れていた。（此方も、式神を使い、サボリ）

気配は、微弱なものだが、気になる事は徹底的にという彼女の真面目な性格から、式神を飛ばしては有力な手掛りを待っていた。

数分の時が経つ。

待っていても大した情報が掴めず、諦め掛けていた彼女の元に一匹の式神が戻り、指先に止まる。

そして、式神の掴んだ情報が直接、術者である時音に運ばれる。

微弱な気配の発信場所は………。

「中等部の屋上………って」

良守が寝る場所として一番多く利用している場所なのは、時音でも知っていた。

———ゾワッ！

急に背筋が冷たく、額には嫌な汗が流れる。

悪い予感が当たらない事を祈りをながら、慌てて中等部の屋上へ誰にも姿を見られる事なく静かに走り出す。

「――良守!……誰も居ない?」

一応、辺りを見渡すが良守の姿も、さっき感じた気配も残っていない。
それに、ほんの少し前まで良守が、その場に居たなど今の時音には知るよしもない。

「……はあ、仕方ない。放課後でも良守に聴いてみようかな」

そう自分の中で結論付けた時音は、高等部の教室へと戻って行くのであった。

誰も居なくなった中等部の屋上には少し強い風が噴き始める。

まるで、これから始まる事件を知らせる鐘の様に風は、哭^なき声を上げるのだった。



「じゃ、ホームルームを終わりにする」

その一言を待っていましたとばかりに教室は、また一段と賑やかさを増す。

だが、そんな反応も程々な様子で、こっそりと良守は帰り仕度を始めるも周りも慣れている為か余り気にする者もない。

準備が終わり速足で廊下を走って行く後ろ姿に皆一度は、良守を振

り向くが、本人に自覚がない。

ただ早く帰りたいと思う気持ちで一杯であったからだ。

「ううゝ眠い。早く帰らないと身が持たん」

結局、あの式神の事が気になってしまい一睡も眠る事が出来ずにいた為、友達からも雨が降るなど茶化され最悪な気分で家路へと帰ろうと門を抜けたところ……………。

「良守」

「わあああゝ！！……………って、なんだ。脅かすなよ」

珍しく時音が良守の帰りを待ち、声を掛けてくる。

「どうしたのよ、アンタ？なんか顔色悪い……………。もしかして昼間、何かあったんじゃない？」

びくっ

良守の肩が一瞬だけ、飛び上がる。

《……………鋭い》

まだ俺は、何も話していないよなと内心思いながら上手く誤魔化そうと考え実行に移す。

「……………何が？」

トボけ様と目線を外すのだが、逆に裏目となってしまふ。

それに一瞬の事だったとはいえ、さっきの反応を見れば、もう確信と言って良いだろう。

鋭い光を宿す幼なじみの目を誤魔化ことなど、今の良守には無謀と呼べる策であった。

暫く黙っていた二人だが。

「……何か遭ったのね。話して」

「……………何も無いし。時音には関係無えよ」

「関係ない訳な————あっ！。待ちなさい、良守！！」

時音の手を振りきり、一目散に家路へと走り出す。
だが、時音も負けずに良守を追いかける。

「待ちなさい良守！アンタ、聞いてるの！！」

「げっ！、追いかけて来る！！」

いつもと逆である。

後ろを振り向きながら様子を窺っていた良守は、周りに誰もいない事を確認すると。

「————結」

印を素早く作り、結界を空へと創り逃げ道を作る。

「コラッ！良守！」

時音も結界を作り、後を追うとするが運悪く近所の子供達が、此方

に向かっている姿が見えた。

タイミングの悪さに下唇を噛み締め、空へと逃げた良守の姿を探す
が、もう肉眼では判別出来ない距離に移動していた。

「こうなったら、力づくでも聞き出そうじゃない！」

消えて行った空を睨みながら自分も家路へと向かう。

《……どうせ、夜になればイヤでも逢うのだから》

と自分に言い聞かせる時音の姿があった。

その頃の良守は……

「やべえ、どうしよう。夜になれば時音と逢う事になるし。だから
って、仕事サボる事は、出来ないし」

これから夜の事を思う度に気が重くなる錯覚に悩まされながら良守
は墨村家に無事で帰り付き、自室へと向かう。

情けない事に時音への巧い言い訳も思い付けないまま烏森へ行く時
間は、無情にも一刻、一刻と近迫って来ていた。

——スウ

誰かが良守の部屋の襖を開ける音がした。

「良兄。起きる時……起きてたの？ 珍しいね」

弟の利守が父の代わりに起こしに来るまで良守は、夢の中の住人が
常だが今日は、珍しく起こしに来る前に起きていた。

利守が驚ろかない方が無理だろう。

「サンキュー。すぐに行くって、父さんに言っていてくれ」

「うん。ねえ、良兄？」

「ん？どうした、利守？」

「具合でも悪いのかなと思って」

「別に何とも。……………そんなに变か、先に起きてた事が？」

「うん、物凄く」

「……………お前な」

少々、へこむ。

実際、そうだから強くは言えないのだが。

「でも、心配してくれて、ありがとな」

良守は、利守の頭を撫でながら、もう一度“心配いらない”と笑顔で応える。

利守は、そんな良守の様子を暫く見ていたが、本人の“大丈夫”と言う言葉を信じ居間へと向かって行った。

自分以外、誰も居なくなった自室で黒の装束に着替終わり、右の掌^{てのひら}に巻いていた包帯を解く。

その下には、消える事のない痣^{あざ}。

「正統継承者」のみが刻み込まれる“方印”が深く刻まれていた。何回眺めていても消える事の方印を見続けていたが、何からか断ち切る様に方印から目を放すと皆が待っている居間に出向き夕食を食

べ始めたのだった。

「いいか良守！雪村の小娘なんかに負けるではないぞ！」

食事の最中に繁守からの激励に、よく飽きないものだ少々、疲れにも似た疲労感に襲われる。

ため息を吐きながら聴き流す良守に構わずに、まだ雪村家の話を話す。

どうやら原因は、学校へ行く前に始まった喧嘩の事。

余程、悔しい負け方をしたのだろうと誰もが簡単に予想がついた。

そんな事を思いながら自分の好物である甘い玉子焼きを食べていた時だ。

——ピーン！

烏森の結界に妖が侵入したのを察知する。

今まで自分の論弁に夢中になっていた繁良の顔つきが変わり良守を見る。

「良守」

「分かってる。じゃあ、行って来る」

そのまま良守は、バックと天穴を持ち相棒の斑尾を連れ烏森へと急いだ。

… … … … …

「ふあああゝ。それにしても、この妖は馬鹿だねえ。まだ、こんなに日が高いって言うのに物好きな事だねえ。そう思うだろう、良守？」

「まあな。だけど、それが仕事だろう？斑尾」

「そうだけどね、良守」

そんな会話をしながら良守と斑尾は暗い夜道を走り抜けて行く。

「そういえば、アンタ昔から暗い夜道を走るのは、わりと平気だったんだね」

「ああ、確かに………。でも別に、いつも通ってる道だし、気にした事なかった様な。それが何、斑尾？」

何事もなくケロッと答える良守に斑尾は、薄気味悪く笑う。

普通の人間が、いくら通い慣れている道とはいえ、暗闇は恐怖しか生まれない場所。

だが、ちゃんとした修業を始める前から良守は暗闇を恐れる事はなかった。

生まれ持った素質が引き起こしたとしても、こんな人間は、本当に珍しい。

方印を持つ人間でさえも最初は、闇を恐れるものだから。

《ああああゝ！！けどお、時守様の場合は特別だけどおおゝ！！》

途中で斑尾が気持悪い笑みをしながら自分の隣を走っている事に気分が悪くなる。

どうせ、この妖犬は自分の世界に入ったきりで、当分は此方側には

帰って来ないだろう。

行く前から本当に色々な面で酷く疲れる。

改めて今日という日が疫日だと思い知る良守であった。

第参夜―赤い狂気―

▼
何やともあれ、漸く烏森へと到着する良守と斑尾。

「どうだ、斑尾？」

烏森を一周し、今居る中等部の校舎に寄りかかりながら探りを入れる。

くん、くん

ご自慢の鼻で妖の匂いを探す斑尾だが、先程、感知した匂いに辿り着く事が出来ない。

「……駄目だね。何か烏森に来た途端、気配が薄らいだ様な感じがするよ」

「何だよ、それ？」

校舎から身体を離し、斑尾に聞くが……………。

「アタシに聴いても分かる訳無いだろう。少しは自分で考えな」

「……………」

ここまで、キツパリ言われれば何も言い返す事が出来ない。

大体、普通は烏森に近付く程に妖は、妖力を増し居場所も分かる筈なのだが。

——ガザッ

茂み方からの物音に良守達は視線を向けれる。

「——…なんだ、志々尾か。来てたんだな」

「ああ」

そう言いながら、志々尾は茂みの中から姿を現す。

「で、お前の方は？」

内容は省いているが、話しは分かりきっている。

「いや、さっきから探しているが何も見当たらない。気配も感じない」

「何か変だな。この妖」

しばらく二人と一匹で云々と唸っていたが、ある人物の登場で、それどころでは無くなる。

「良守！」

————ビクッ!?

呼ばれた良守は肩を小刻みに震え慌てて耳を塞ぐ。

まるで、今の声を聞かなかった様な仕草だ。

「…………お前、何か怒らせる事でもやったのか？」

隣にいる良守を見れば逃げる体勢に入っていたのだが、時音の結果に拒まれ無力な結果に終わる。

「さあ、観念して——」

『——良守に、近付くな』

「「「!？」」」

丁度、時音が良守に詰め寄ろうとした時に初めて自分達以外に「何者」かの気配に気が付く。

三人、同時に嫌な冷や汗が頬に伝い、また声が聴こえた。

『約束通り迎えに来たよ。良守』

ヒラリと黒い着物を翻ひるがえしながら姿を現すのは、長身の背丈せたけを持つ赤い長い髪の男が目の前にいた。

志々尾と時音は、良守の顔を同時に見るが知らないとはばかりに必死に首を振るう。

「誰なんだよ、お前！ 適当な事ばかり言いやがって俺は、お前なんか——」

急に黙りこんだ良守を不審に思う時音と志々尾。

どうしたのか、と話しかけようと2人が駆け寄ると、苦しそうに胸を押さえる良守がいた。

「「良守!!」」

二人同時に名前を呼ぶ。

苦しむ良守を志々尾が抱きかかえるが、いくら名前を呼ぼうが聴こえてくるのは苦しい息遣いだけ。

目の前に大切な人が苦しんでいるのに関わらず、自分達は何も出来ない事に苛立ちを覚える。

「アンタ達! 何、ボサツとしているのさあ! 早く良守を連れて一端、退くんだよ!!」

「そうだぜ、ハニー。このままじゃ、ちよつと、ヨッシィーがヤバい!!」

斑尾と白尾が言う事も一理ある。

今、出来るの事は良守を一刻も早く「得体の知らない妖」から離れる事。

目で合図し合うと二人は、良守を連れ校舎の中へと逃げ込む。

暗闇が辺りを包み込む校舎の中を良守を抱えた志々尾と心配そうに様子を窺う時音。

その二人を追いかける斑尾と白尾の影が、慌ただしく駆けて行く。

タダッ!!

二階の階段を登りきった時に時音が「何処かの教室に隠れましょう」と提案を入れる。

これでは、埒が無く走りながらは良い案が浮かばないと判断した結果からだ。

——ガラッ!!!

まず、始めに時音が扉を開け中の様子を確認する。
特に異常が見付からない事を皆に伝え入ると急いで扉を閉め結界で
入口を塞いだ。

《これで当分、時間を稼げはずよね》

ふう——

一息吐く、時音。

志々尾は良守を壁側に座らせようと、静かに降ろす。
いくらか苦痛が薄らいだ様子だが、まだ安心出来る状況ではない。

「良守、大丈夫？」

そんな彼に、時音が声を掛ける。

「うう……………だ、大丈夫うう……………」

何とか、声にだして伝える良守だが。

「あまり、大丈夫には見えないんだけど」

「……………」

強がっていた良守だったが、体力の限界が来たらしく、そこで気を
失ってしまう。

「…………もう少し自分の事を考えろ」

言葉数が少ないが、志々尾なりに心配している様子が伝わる。不器用な……だけど、彼らしい言葉に口元が緩む。思考を切り替え、時音は相棒に視線を向ける。

「…………どう、白尾。アイツ、何処にいるか分かる？」

「さっきから探しているんだが、匂いが無いんだ。ハニー」

「……斑尾は？」

「こっちも、お手上げだよ」

斑尾と白尾の鼻では、アイツを見つけ出す事が出来ない。では、どうやって見付ければ良いのか…………。

「こうなったら、応援を呼ぶしか…………」

時音は、今の状況を何とか解決してくれる人達に式を飛ばす。

ばさっ

時音の意志に應えるべく、鳥形の式が暗闇へと羽ばたいていく。

その、小さくなっていく姿を志々尾は、悔しそうに拳を硬く握り絞め見送っていた。

ふうー

もう、一度、時音の溜め息が聞こえる。

《…………泣き虫だった『あの子』を守るのは、私の役目だと思

つっていたのに……」

幼い自分達の事を思い出しながら、今の良守と比べる。実際、成長した自分達を見れば、いつも助けているのではなく、助けられている方が多い。

『見つけた。それでも、隠れんぼのつもり？』

「————！！！」

慌てて声がした方を振り向いて見るが、妖の姿は見えない。

「————結」

護身用の為に、緑の結界を自分達の周りに張る。

『——クスッ。今頃になって、そんな術……』

また、声が聴こえた。

「白尾、斑尾。匂いは？」

「僅だが感じるぜ。ハニ」

「こっちもだよ」

だが、匂いと混じり違うモノも僅かに感じる。

《だけど、この臭いは………何だろうね》

感じる違和感に疑問を持つが、残念な事に斑尾の答えに応じる者はいない。

「白尾、斑尾。方向は！」

時音の声に気付くのが遅れてしまう斑尾だが、ちゃんと白尾が答えたので問題なく終わる。

「正面だ。ハニー！」

正面に身体を向け、時音は一度、軽く目を瞑る。

《今の私に出来る事……心を乱さず研ぎ澄まし貫く》

「——結！」

結界の矢が、白尾の指示した方向と妖の気配が一番強い場所を集中的に放つ。

大振りな結界を張ろうが、通り過ぎてしまうのなら……。

逃げらる場所を塞げば良い。

それならば、この結界での攻撃が有効的だと考えたのだ。

滅する事は出来なくても、負傷ぐらいは……。

そして、もう一つの狙いが彼女にはあった。

そう。

数多く放たれた結界を一つ、一つ見ていけば、結界の端に少しだけ付着した赤いモノが目を惹いた。

いくら妖でも血は隠せないだろうと予測し、そして、予測は確信へと変わっていた。

「おのれ………」

傷を負った妖は、逆上し右腕を急速に変化させ、大きな鎌を時音に振り降ろす。

「————小娘があ!!!!」

《まずい》

逃げようと頭では解っているのだが、力を使い過ぎてしまった時音には、その体力がない。
目の前に迫る刃を見つめるしかない。

「————コイツを持ってろ」

「えっ？」

ポンっ

と、投げ渡された良守を時音は慌てて受け取る。

時音の頬に風が走ったと瞬間に志々尾が、目の前の妖の刃を受け止め、斬り裂いていた。

一瞬の内に片が付いてしまった事に呆氣に取られてしまう時音。
だが…………

————ボンッ!

軽い爆発音と白い煙が辺りに広がり視界が晴れた頃には、妖の姿は無く代わりに式神に使用される呪符が二つに切り裂かれていたモノが残っていた。

志々尾は、それを無言で拾い上げ、それを時音に渡す。

こういうものは、結界師の専門分野だと踏んでの判断。

その間に志々尾は、良守の様子を見ている事になり再び腕の中に返される事となってしまうた。

だいたい呼吸も落ち着いたらしく今は、普通の眠りに入っている感じがした。

「白尾、斑尾。……どう思う？」

「ハニーは、どう思ってる？」

質問に質問で返される。

反論せず、自分が考えついた限りの推測の答えを言葉に変え伝える。

「たぶん、最初に現れた妖が本物。そして、私達が校舎の中に隠れている間に入れ替わった。つまり、もう此所には、あの妖は、いない事になる。……どうかしら。白尾、斑尾？」

「流石、ハニーだぜ。………と、言いたい処だけど」

「えっ？何なの？」

「まだまだ考えが、甘いつて事さね。まあ、小娘にしちゃ良い線いってるけど」

斑尾は、意味ありげな目つきで時音を見た後、良守の元に飛んで行く。

「どういう事なの。白尾？」

「妖が作った式神ってのは、ありがち間違った発想じゃない。

だが、出来が良さ過ぎだ。もし、そのくらいの力を持っているのなら、式神なんて面倒な手は使わず、自分で乗り込んで来るはずだ」

「……………そう言われればそうね……………——って、あれが人なの！？」

「……………人間にしては、余りも存在が離れ過ぎてる」

今まで、話を聴いていただけだった志々尾が話に参加する。

「なんだ、やっぱゲンゲンも同じ事考えてたんだ」

「……………その言い方は止めろ」

「話を脱線させない！元に戻すわよ。じゃ、アイツは妖とも人間とも判断がつかない……………って、事なの。白尾」

「ああ。けど、アイツが何で式神を使ったのか。何の目的で、烏森に來たのか……………。さっぱりだぜ。ハニー」

悩み始めた時音、志々尾、白尾の前に妙に勝ち誇った様子の斑尾が、嫌でも目に入る。

「——ふふん（にやり）」

不気味な笑みを浮かべる斑尾と目が合ってしまった。

「……………斑尾。何か知ってるのね」

斑尾の笑みにツツコミを入れたいが、気分を損ねて貴重な手掛りを

捨てる程、ちっぽけな神経を持ってなくて良かったと自分を褒める時音。

「そんな事、分かりきってるかじゃないか」

「……………!？」

「だから、どういう事なの。斑尾」

「良守の首の辺りを見れば、判るさ」

「……………?」

一同は、斑尾の言われるままに良守の襟首を少し解くと、そこには、黒い痣が浮かび上がっていた。

「……………何、コレ。痣って言うよりは」

「何かの呪印の様にも見えるな」

時音の言葉を志々尾が繋ぐ。

「だけど、見たことがない呪印だけどねえ」

斑尾が呟く。

「限君は、何か知らないかしら？」

「……………俺も、初めて見る」

「白尾は？」

「駄目だ。ハニー」

やっぱり肝心な答えは、すぐに見付かる筈がない。

結局は、振りだしに戻ってしまったという事実だけが、虚しく残され………少々、投げやりな気持ち抱いたまま後片付けを始めるのだった。

約、一名を除いてだが………。

… … … … …

「時音！」

「良守！」

《——あっ！、そう言えば………》

応援を呼んでいた事をすっかり忘れていた。

教室の修復を片付け、急いで下に降りて行くと、そこに到着したのは両家の現・当主が待ち構えていた。

そして、志々尾に背負わられている良守の姿に繁守の顔色が一気に下がり、隣にいる時子も驚きを隠せない。

今まで起こった出来事を代表者として時音が説明をする。

両・当主とも一言も聴き残すまいとして、時音が話終わるまで口を挟む事は無く進む。

「うむ。事情は、解ったが……………」

「妖犬の鼻でさえ、微弱な感知しか出来ない妖……………ですか」

繁守が黙り込んだのを見て、時子が続きを話す。

流石、長年一緒に烏森を守ってきた結界師だ。

互いに話し合わなくても、自然と思考が似てくるのだろう。

当然の結果だろうと、誰もが感心している中……………。

「何で！僕の台詞を横取りするのじゃあ！！」

「あら、何処かのジシィが何も言いませんから、ボケたのかと思いまして説明したまで。それに私は、ただ自分の意見を口にしたいだけの事。勘違いも良いところです。流石は、オマケの一族」

「オマケとは、聴きずてならん。我が一族こそが由緒正しき正統継承者じゃ！これを見よ！！」

そう言いながら、自分の右の掌^{てのひら}に刻まれている方印を見せると時子も負けずに……………。

「お黙りなさい！！我が一族こそ由緒正しき正統継承者です！」

と、負けずに方印を見せる。

「うわぁー！！しまえババア、目が腐るわい！」

「何ですって！！」

……………前言撤回。

やはり、ただの喧嘩仲間なのだろうか？

いつまで続くのか、分からない喧嘩を止めて先に話を進めたい時音達だが……………。

この喧嘩の被害者には、なりたくはない。

良守が良い例だ。

何とか自分達だけで解決しようと決心する時音、志々尾、斑尾、白尾。

2人を残し烏森から帰る残りのメンバー。

その頃の繁守・時子は未だに喧嘩をしていたが、潮時を感じ始めた2人は、別々のルートで家路に帰る事となったのだが……………。お互いが相手より、早く帰る？という妙な対抗心に火がていてしまい結局、門の前で鉢合わせしてしまう。

冷めかけていた喧嘩&バトルが始まってしまった。

近所迷惑考えて欲しいものだが要らぬ心配のようで、本人達は、バトルが始まると同時に結界を両家に張っていた為、近所に迷惑が掛らない。

掛らない事は非常に嬉しいのだが、コッチ（両家族）は、いい迷惑だった。

第肆夜―不安定な心―



朝になっても良守は、目を覚ます事なく眠り続けていた。

今は、繁守と修史の二人が交互に様子を見に行っているのだが、目を覚ます予兆がない。

烏森から帰ってきた彼の身体には、首元の痣以外は大した怪我は見当たらず、後で斑尾に詳しい話を聴いたのだが原因となるものがないまま。

その後も、烏森に現れた妖の事を調べているのだが。

直接、繋がりそうなモノもなく………ただ、悪戯のように時間だけが虚しく過ぎ去っていった。

そして時間が許されるまで、良守の傍で見守っていた修史だが、そろそろ皆の朝食を作る時間帯になり、その場から腰を上げる。

本当なら、もう少し、傍に居てあげたいのだが、自分達にとっても“食”というものは、直接、生きる事に繋がる大切なもの。

それに、良守が目を覚まし、元気がない姿を見られ余計な心配を掛けてしまったら意味が無い。

こんな時だからこそ、普段通りの生活が大事なのだ。

皆に美味しい、ご飯を作り、利守には元気よく学校に登校できる様に笑顔で見送らなければならない。

力の無い自分に出来る………せめて、此くらいは、しっかりと勤めるのだと。

「良守。少しだけ、席を外すからね」

窓から入り込む風に、彼の髪が揺れる。

その髪を優しく撫でながら、修史は台所へと足を動かして行く。

足音が遠ざかる中でも、やっぱり彼は起きる気配が無く、眠り続けている。

そんな時だ。

『良守。………まだ眠っているの？ちよつと、術が強すぎたかな』

良守以外、居ない筈の部屋から彼では無い声が部屋に響く。

そして、黒いドロリとした塊かたまりから姿を現れたのは、原因となる人物。いつもなら気配を察知し、直ぐに飛び込んで来る繁守だが………

……今は、その姿が見えない。

理由は、簡単。

この人物が、出来るだけ気配を消しているのだが――――。

この場所は『墨村家』だ。

自分達の空間に敏感な彼等（結界師）が気配に気付かないとなれば、この者の力は計り知れない。

――――ぱさりっ

誰も居ない事を確認した上で、その者は頭から被っていた山吹色の羽織を取り、それを軽く両肩に掛ける。

まず、最初に現れた色は、燃えるような長い髪髪の赤。

その髪を無造作に手櫛で掻き上げ、見えるのは、髪と同じ切長の瞳。すらり、と伸びた身長と中性的な顔立ちからして性別不能と思われたが、召しているものは朱色の狩衣。

かろうじて、男と思える姿。

一時、良守を見下ろしていたが、彼の傍に近付き、その場に座り込む。

そして男は、眠り続ける良守に静かに語りだす。

『……………良守。僕は、この刻を……………いや、時間を待っていたんだ。良守は、知らない……………いや、知る筈がないけど』

少し悔しそうに、下唇を噛む。

次第に鉄の味と濡れる感覚に気持ちが悪くなるが唇は、まるで紅^{べに}を塗った様に艶やかになっていた。

そして、右手を取り自分の額に軽く押し当てる。

まるで、神に許しを請う様に。

何かの誓いを立てる様に。

… … … … …

———ガラッ

朝食を終えた繁守が、良守の部屋を訪れて開けるが、もう男の姿は何処にも無かった。

変わったと言えば、布団から少し右手が出たままの状態で良守が眠っている事だけ。

きっと、自分達が席を外している内に、何度か目覚めたのだろうと解釈する。

だが……………。

繁守が一步、部屋に足を踏み入れた瞬間に眉間の皺が深くなる。

僅かだが、微かに残る妖氣に何者かが侵入した事を知り愕然とする。微弱なものでハッキリと解らないとはいえ、屋敷に妖を入れてしまった自分に情けなさを感じた。

「……………うう」

「良守！」

思考に沈みそうになっていた繁守を現実に戻したのは、良守の小さな声。

「良守」

もう一度、彼の名前を呼ぶ。

呼びかけられた彼は、ゆっくりと瞳を開けると同時に眼からは涙が、後から後からと流れていた。

「……………良守？」

呼びかけても、まだ意識は“ユメ”をさ迷っているのか、視点が定まらない。

「良守！」

少しだけ、強く呼びかければ、ゆっくりとだが彼の眼に繁守を映る。

「繁じい……………。俺、一体……………」

身体を起こそうとした彼だが、繁守に止められてしまう。

「どこか、痛むのか？」

「いや。別に何処も……………何で？」

「珍しいと思ってな」

「だから、何がだよ!」

勢いのままに良守が、布団から起き上がる。
まだ、体力が戻っていない身体は、彼が思っていた様に動いてくれ
ず倒れそうになる処を繁守が慌てて支える。

「お前、泣いている自覚がないのか?」

「……………えっ?」

たつぷりと間を置いた後、頬に手を置くと冷たい水に似た感触が伝
わる。

だからだろうか。

涙に触れた途端に自分でも分からない感情が、胸の中に一気に流れ
てくるような気持ちの悪さが彼を襲う。

必死に涙を止めようとする良守だが、なかなか止まろうとしない。

「よ、良守?」

両手を顔に覆ったまま動こうとしない。

「今日は、ゆっくり休め。烏森には、儂が代わりに……」

「仕事は休まない!!」

姿勢を変えずに、強い口調で話す彼の様子に上手く言葉が出ない。
そんな居心地の悪さに、先に良守が口を開く。

「……………仕事まで寝るから、一人にさせてくれ」

早口で繁守に言い終わると同時に布団を頭から、すっぽりと被ってしまう。

少し不安が残る繁守だが、本人が話せる状態ではないと悟り、静かに部屋から出て行く。

《……………焦りは、禁物じゃ》

自分に言い聞かせる様に心の中で呟き、部屋を後にする。

その後、部屋から繁守が出て言った事を確認した良守は、ゆっくりと身体を起こす。

身体を起こせば、また自然に流れてくる涙。

それを止めようと、膝を立てて出来るだけ声が出ない様に静かに泣く。

「俺……………本当に、どうしたんだろう？」

身体を丸めるながら、困惑気味に呟く。

この頃、自分自身の事なのに分からないの事が多い。

今のように、泣きたくもないに自然と眼から涙が流れたり……………。

「もう、何なんだよ。一体、俺が——！？」

一瞬、黄金色の光が頭の中を駆け巡る。

「……………何？……………今のは？？」

声に出しても良守の疑問に答えてくれる者はいない。

黙々と考える事となる。

そう、机の上に置いてある時計が視界に入ってくるまでは……………

「――!?俺、こんな時間まで!」

その言葉に流れていた涙が、ピタリと止まる。

現時点を持ち、昼の12時に差し掛かろうとしていた。

先程、繁守が部屋から出て行ったと思っていたのだが、自分の予想とは、かなり違った時間帯に驚く。

今更ながら良守は、学校を休んでしまった事を受け止めていたが、あることが頭に浮かんでしまった。

「――はっ!今日の給食、コーヒー牛乳じゃないだろうな」

何とも単純な頭だろうか。

自分が今さっきまで、深刻に悩んでいた事など綺麗さっぱり片付けられていく良守の頭の中。

そして、そんな良守の様子を、やや呆れ気味の様子で見守る繁守と修史。

当然、良守は、自分の思考で一杯なので、二人が見ている事など気付く訳がない。

「あやつは、全く、単純じゃわい」

「でも、それが良守の良いところだと思いますよ。お義父さん」

「…………まあ、今のところ、要らぬ心配と言った所だろう」

「そうですね。ご心配を懸けました」

「いやいや、修史さんが謝る事ではないですぞ。全ては、あのフヌケが」

軽口を叩いている繁守だが修史は、本当は孫の良守の事が心配で溜らず仕切りに部屋前をウロウロと歩いていた事を知っていた。

ただし、良守が眠っている時間帯のみだが。

隠し通しているつもりだが、繁守の努力は修史の前では無駄なもの。暫く無言で良守の様子を伺っていた二人だったが、いつもの調子に戻っている事に、一先ず安心する。

そして修史は、目を覚ましたばかりの良守の食事の準備へと台所に向かう。

たぶん彼の事だ。

普段よりも、もっと腕を奮った料理が出来上がるだろう。

トン、トン、トン――…

台所から生み出される音は、嬉しさ含んでか軽やかな響きだ。

一方、繁守は敷地内の蔵の中へと足を運ばせていた。

そこには、先代の結界師達が自ら関わった妖の記録などが、ぎっしりと保存されていた。

その数は、半端な量ではない。

一つ、一つ、紐解くとすれば、一体、どのくらいの時間を掛ければ読み終わるのだろうか。

読みだけでも、骨が折れる作業であるが、この書物の中に原因となるモノの正体が記載されているのかも知れない。

だが、昔から烏森を祖先達と守ってきた斑尾の証言では『見た事の無いモノ』だと話していた言葉が頭の中で再生される。

と、いう事は……………その妖は先代達の時代には現れなかったという事になる。

それでも僅かな希望を胸に抱き、丁寧に書物を手に取っていく。

――カサッ

書物を捲る音が聞こえる。

一つでも手掛かりになりそうな言葉を見付ける為に。
一人、孤独な闘いが始まったのであった。

第伍夜―良守の居ない夜―

▼
それぞれの時間が流れる中、太陽の光が少しずつ弱まり空には暗闇の色が広まっていた。

そして、空の主役は太陽と交代し月が支配を始める。

今宵は、月の光さえも遮ってしまう程の厚い雲が辺りを覆い尽くした為、普段よりも濃い暗闇が生まれた。

夜の住人―妖―

それを狩る“結界師”との夜を烏森という名の舞台で起こる演舞が静かに幕を開けたのであった。

◆
「ああー。なんで私が、アンタの世話なんか焼かなくちゃならないのさあー」

はあー、と本人が目の前に居るのに関わらずに壮大な溜め息を溢す。

「何を言うとおる！ 相手が何者なのか分からんのだぞ」

そう今、烏森に居るのは繁守と斑尾の二人。

勿論、良守が行く予定だったのだが繁守により強制的に居残り組として置いて行かれたのだ。

それで黙る良守では無いのだが繁守の『足を引っ張る奴など邪魔に過ぎん』と、厳しい言葉に何も言い返す事が出来ない。

冷たい言いようだが危険な目には遭わせたくないのが本音。

しばらく睨み合いが続いていた二人であったが繁守の『邪魔』という言葉が彼の胸に刺さったのか悔しそうに顔を歪める。

その後、良守は、そのまま何も言わずに再び、布団に潜り込んでしまった。

繁守は、そんな姿の良守を複雑な心境で見守る姿は、結界師として馴た厳しい祖父ではなく優しい祖父としての姿だった。

一通り回想を終らせた繁守に斑尾が口を挟む。

「だけど、どうせ子守を為せられるのなら可愛い良守が良いんだけどねえ」

「フン。それこそ相手の思い通りに踊らせられるだけじゃわい」

「アンタも相変わらず厄介な性格だねえ。素直に孫が心配だって言えばいいじゃないか？」

隠していたつもりの繁守だが長年一緒に活動していた斑尾の前では、無駄な努力となる。

「つべこべ言わずに、さっさと妖を探しに行かんか！」

「全く、そういう処は良守と同じなんだから。流石、アンタの孫と言う事は有るわよ」

フフン、と鼻を鳴らしながら去って行く。

「――あれ？繁守さん」

「何だ。今日は、繁坊が来たのか」

雪村家の結界師、時音と妖犬・白尾が遅れて烏森にやって来た。
それにしても何故、白尾までもが微妙にガツカリしているのは気の
せいだろうか？

——ガザッ、ガザッ……………

茂みの中からの足音に身構える。

だが、その気配の持ち主からは敵意を感じない。

まあ、当たり前的事だろう。

だって、この気配の正体……………。

「珍しいわね。限君が一番、最後なんて」

「本当だよな。ゲンゲン、いつも誰よりも早く来てるのにな」

時音と白尾は、口を揃えて同じ事を言う。

「少し、用があつて遅くなっただけだ。……………アイツは当分、“烏
森”に出来ない方がいい」

繁守を見た後に志々尾が独り言のように話す。

「ええ。そうかも知れないわね。相手の手の内が解らない以上、迂^う
濶^{かつ}に近付けさせる訳にもいかないわ」

主語が抜けているが時音が指している相手は、紛れもなく良守の事。

「斑尾。奴の臭いは？」

「さつきから探しているよ。けど………」

「けど、何だと言うのじゃ？」

「………嫌な予感が」

斑尾は、そう言うなり黙り込み夜空に浮かぶ月を見つめるだけで話し掛けても口を開く事は無かった。

その姿は、月に願いをかけている様に思えた。

… … … … …

「それで、何も起きなかったわね」

「ちゃんと妖なら出てきたじゃないか。ハニー」

「………そう言う事じゃなくて」

「昨夜の妖だろう？」

さつきまでの脳天気な雰囲気ガラリと変え、真面目な態度で接する白尾。

その答えに無言で頷く。

でも何故、今夜は姿を現さないのかが疑問に残る。

「此所で、こうしていても答えが出る訳では無い。一先ず、ここは解散じゃ」

「「はい」」

烏森に惹き付けられて来る妖も、目的の妖も待っていては来ないと判断した繁守の提案に従う時音と志々尾。

自分達の中で一番、数々の場数を踏んでいる“繁守”の言葉を素直に聴き入れる事が今の二人に出来る最低限の事となってしまった。何も出来ない自分が、無償に悔しかった。

だけど、弱音だけは絶対に吐きたくない。

気持ちで負けてしまったら、全ての事が取り戻しの付かない事態へと繋がる事を彼女は、若いながらに経験として知っていた。だから……

「誰が、あんな妖に大事な良守を渡すものですか」

「そうだな」

口数が少ないが志々尾も、やる気満々の様だ。

いや、これは……

やる気を越えて黒い感情が表へと溢れ出ているは、気のせいだろうか？

とにかく、今宵の烏森は、何事も無く平和(?)な時間が流れていたのだった。

第陸夜―変化―

▼
烏森から、それぞれ自分の家へと帰りついた繁守達は、一度、疲れた身体を休ませる為に布団の中へと潜り込む。
そして物語は、再び墨村家へと戻る。

… … …

「……………良守。ゆっくりで良いから起きられるかい？」

ゆっくりと目を開ける彼の視界に映るのは、いつも優しく見守ってくれている修史の姿。

その彼の言葉に答えるように良守は。

「……………（コクリ）」

無言で頷いた。

起き上がろうと修史が手を貸し上半身を起こした頃には、また自然と涙が頬を伝わって流れていた。

“ユメ”の中の内容は未だに覚えていないのだが“悲しい”という感情がグルグル回り、身体が思う様に動いてくれない。

しかも涙は、止まる事を知らないか何時までも流れてしまう。

目覚めた日から、同じ様に必ず涙を流すだから……………流石の良守も感情を落としてしまった様に無表情となってしまった。

しかも、段々と回数が増えるにつれ、人前に姿を現そうとしない。それでも修史は、何とか元気な良守に戻って欲しいという願いを込めて毎朝、起こしに行くのだが……………。

やっぱり、今日も“泣き顔”の姿しか見る事が出来なかった。

早く、元気な笑い声を聞きたいと願っているのだが、肝心な良守は泣いているばかり。

そうでなければ、ただ眠たそうに目を細め感情を失ってしまった様に外を眺める事が多い。

もちろん、こんな状態では、学校も結界師としての勤めにも強制的に休みを取る方法以外の選択は無かった。

… … … … … …

皆で揃って頂く朝食も終わり（普段とは違う良守の様子に心配になる利守だが、修史の“大丈夫”という言葉で学校へと行ってます）一人、縁側に腰掛け、ただ庭を眺めていた良守に修史が柔らかな笑顔で近寄る。

「良守。少し風が冷たくなったから羽織を持って来たよ」

「……………」

視線を修史の方に向けるが、声を出す事なく終わる。

それでも修史は笑顔を崩す事なく、彼に持ってきた青色の羽織を肩に優しく掛ける。

1日でも早く、元気な良守に戻って欲しいのだが、風邪を引かれたらもともない。

「…………じゃあ、良守。また、後でね」

彼の頭を撫で、その場から立ち去ろうとした時、修史の動きが鈍くなる。

動きを止めているものに視線を移せば、遠慮がちにシャツの端を掴むのは、彼の小さな手だった。

「……………良守」

今まで大きな反応を見無かった分、今の変化に驚きと嬉しさが込み上げてくる。

「どうしたの。良守？」

良守と同じ目線で優しく話しかける。

「……………」

だが、話掛けてみるが、反応がない。

そう言えば、よく何かに掴む癖を良守は昔から持っていたのを思い出す。

それも一番大切な事を伝えたい時に見られていた仕草。

結局は伝える事が出来ずに、大きな目を見上げてくるだけが多いのだが。

同じ目線にあった虚ろな瞳からは、また、次々と涙が流れる。

「大丈夫。大丈夫だから泣かないで良いんだよ。良守」

修史は、そう良守に伝えながら優しく抱きしめる。

そうしている内に、外の陽気さと修史の温もりに安心しきったのか。そのまま、眠りについてしまった。

「……修史さん。良守の様子は？」

丁度、蔵から帰って来た繁守が良守の隣に腰を降ろし様子を伺う。

「お義父さん。今、眠ったところです」

そう言うのと修史は、身体をずらし、彼の姿が見える様にする。

そこには、何も知らない無垢な子供の様な寝顔に、つい笑みが溢れる二人。

まだ何も解決した訳ではないが、幸いな事に“この子”の目の前には何一つ悲しい事が起きてない。

願わくば、このまま何事も起こらず、問題が過ぎ去ってくれば良いのだが。

ふわり———……

彼らの周りを通り過ぎていく、修史は、そっと風に願いを乗せた。流れる風も、優しい彼の願いに応えるように柔らかな風を皆の元に届け、空へと帰っていくのであった。

第漆夜―意外な訪問者―

▼

――ガラッ

しんみりとしていた雰囲気の中、墨村家の玄関を開け音に修史と繁守が顔を上げた。

「ただいま」

妙に聞き覚えがある。

もしかして、この声の持ち主は……………。

「……………何してるの？皆して」

「「正守！」」

実に、見事なハモりに正守は控え目に笑う。

「お帰り、正守。突然帰って来てくるんだから、びっくりしたよ」

「あれ？ちゃんと、父さんには、先にメールを送った筈なんだけど？」

正守は、携帯を取り出しながら修史に見せる。
確かに、送信メールのボックスには修史宛てのもの。

「――ごめん！最近、パソコン見てなくて」

「父さんも携帯、買いなよ。結構、便利だよ」

「でも、あんまり使わなし……………勿体無いなくて」

「正守！術者なら式神を使わんか！！」

繁守が両手を上げながら正守を怒鳴り散らす。が当の本人は、知らぬ顔。

一応繁守を落ち着かせた後、正守は軽く膝を折ると修史の腕の中で眠っている良守に視線を向ける。

ゆっくりと手を伸ばす。

もう少しで触れるというところで良守の瞳が、ゆっくりと開くのだ
が……………まだ、寝惚^{ねぼ}けているのか。

上手く視点が定まらず、虚ろげな表情で正守を見上げていた。

「良守」

彼の名前を呼べば、少しずつだが、良守の瞳に光が見え始めた時だ。

――ドオンッ！！

突然の地響きと共に立ち上がる土煙。

辺りを確認したいが、視界が遮られ、状況が掴みにくい。

状況は解らないが、修史は無防備となっている良守を強く握りしめ、その二人を正守が守る様に少し前へ出る。

繁守というと、まだ視界が回復しないのにも関わらずに走り出してしまふ。

——ゴーン！

鈍い音が皆の耳に届く。

「今の音は?!」

墨村家の中で靈感を持ち合わせていない修史が不安そうに呟く。

「大丈夫、父さん。それより、良守を」

原因は解らないが、今、騒いでも混乱が増すだけ。

一時待ってみると、濁っていた視界は晴れていき……………其所に居たのは、気絶している繁守の姿。

「——お義父さん!どうしたんですか!?!」

修史は、良守を抱いて立ち上がろうとした処を正守が手で止める。

「待って、父さん。結界に当たっただけだから」

青い結界を眼にする事が出来ない彼の為に、結界を軽く叩いて見せる。

——コンコン。

何も写らない修史の眼の代わりに耳に届く音が、結界の存在を証明させた。

だが、余程の力の持ち主なのであらうと正守は、密かに思う。確かに見た目は、普通の結界なのだが……

言葉では言い表せ無い程の力を感じる。

問題なのは、誰が造り出したのだろうか。

結界の色は、青なのだから雪村の可能性は消える。

候補として繁守を考えたのだが、さっき程のの行動で消えた。いくら何でも、自分の結界に突進する様な人ではない。

正守は、来たばかりで、何もしていない。

そして、残った術者と言えば。

「……………良守」

呼び掛けにも反応せずに眠り続ける。

だが、それと同時に強靱な結界に歪みが走り、硝子ガラスのように跡形も無く砕けてしまう。

《やっぱり、この結界は良守が？》

一見、無理な推測だと思われるが、そう考えれば筋が通る。

自分では気が付いていないだろうが、良守の内にある“チカラ”は計り知れないモノだから。

「だけど、今の音は？」

修史は、良守を抱え直しながら話す。

その言葉に自分の思考に入っていた正守が現実へと戻る。

「……………多分、コレだと思うよ」

先程、自分が見付けたモノを指さす。

その先にあったモノは……………
まるで隕石が落ちて来た様な穴が、自分達の前に、ぽっかりと空いていた。

「——これは、一体!？」

いつの間にか復活していた繁守が、大きく空いた穴を除き込み調べるのだが……………何も無い。
と、すれば考えられるの事は。

「何処かの誰かが、巨大な力のエネルギーを放った（のじやろう）」

繁守と正守の意見が一致する。

「他に、思う事はあるか。正守」

「……………いえ、特に何も。辺りには、妖気らしいものを感じなかった。だが、人間だとのモノとは思えないような桁外れのチカラでした。それに……………」

正守は、ゆっくりと立ち上がり、修史の腕の中で眠り続けている良守を見下ろす。

「どうやら彼方あちらの狙いは、良守の様な気がします」

推測で話している正守だが、確実に真実に近付いている確証がある。
先程、良守に近付こうとした時。

一瞬だが、身体を貫く様な殺氣つらぬを覚えたのだ。
練ねつとりと、絡み合う感覚は、簡単に消え去るものでは無い。

いつまでも残る感覚に、知らない内に彼の額からは冷や汗が流れていた。

そんな正守の話を聴いていた繁守が、重い口を開く。

「正守。昨夜、烏森で良守が“何者”の奇襲を受けたのじゃ。斑尾の報告では、どうやら“良守”に興味を持っていたと」

「それで、そのモノは？」

「何も、ハッキリと解っておらん」

「……………つまり、異能者なのか、妖なのか検討が難しいと……………
…いう処ですか？」

腕を組ながら攻撃を仕掛けて来たと思われる方向を睨む。

「……………そうじゃ」

それとは反対に肝心なところを正守に持っていかれた事に繁守は、軽くシヨックを受けていた。

「それよりも、良守を家の中に」

「そうじゃな」

「はい」

外に居るより良いだろうと正守の案に乗る繁守と修史。

眠っている彼を起こさない様に立ち上がると、ゆっくりした動作で部屋の中へと入る。

一応、部屋に異質なモノが無いか確かめる繁守と正守だが、不審なものは一切見られない。

そうしている内に修史は、押し入れから布団を出し、彼を寝かせる。

「————結」

護身用にと正守は、良守の周りに五重結界を張る。

「————結」

ピシッ

そして、その上から繁守が結界を張る。

本人曰く『念には念を』と言うことらしい。

部屋を出た3人は大きな穴が出来た庭を眺めた後もう一度、良守が眠っている部屋の方角を見る。

「はぁー」

眺めると、自然に溜め息が出てしまうのだった。

第捌夜―夜行―

「そう言えば、正守。突然、どうしたのじゃ？」

今更だが、彼の突然の帰宅理由を聞いてみる。

「はい。俺の部下から連絡がありました。……………ここ最近“烏森”にて、何かの変調が起きていると」

「むっ！？ “烏森”に一体どのような！」

「それが解らないから“俺達”が来た訳です」

「“俺達”？」

正守の矛盾した言葉を修史が繰り返す。
どう、考えても可笑しい。

だって、彼は、どう見ても一人なのに。
団体を現す言葉を口に出しているのだから。

「正守――」

修史が、その事に触れようとした時だ。

「――「お疲れさまです！頭領！！」――」

庭から聞こえる元気な声を辿れば、そこに居たのは正守の部下である夜行の面々が姿を現す。

よく見れば何人かが、穴に堕ちており……………引き上げてもらっている姿が見えるのが今は、ツツコまないでおこう。

「ご苦労さん。そういう事だから、良いよね？」

まだ、何も言っていないが、もう決定しているようだ。

そして、派手に登場したのは、刃鳥、翡翠、花島、影宮、八重樫、秋津のメンバー。

突然の訪問に呆気にとられる繁守と修史だが、すぐに思考を切り替える。

「正守、言っておくが――」

「分かっています。“烏森”を汚す様な真似はしませんよ」

そう言う正守は、庭の方に歩き、夜行メンバーの元へと足を運ぶ。

「他の者は？」

「皆、各地での依頼の為に散ってます。任務終わり次第、すぐに此所に向かうよう指示をだしてます」

刃鳥が報告を入れると正守は「分かった」と短く返す。

「頭領。俺達は、皆が揃うまで何をすれば？」

影宮が今、集まっているメンバーを代表して質問をする。
全員が揃わなければ行動は移せない事ぐらい自分達だって分かっている。

「そうだな……………」

腕を組み左手で顎を撫でながら暫し思考に入る。

「決めかねていないのでしたら掃除などは？これから、お世話に成りますので」

刃鳥の提案にメンバー全員が頷く。

その様子に正守は顎から手を放し口を開く。

「反対な者は、いないみたいだし。決定だな」

「」「」「はい！」「」「」

皆が掃除道具を取りに行こうとした時に正守が、何かを思い出したように声を上げる。

「そうだ。庭の離れに蔵があっただろう？」

「その蔵が、どうしたんですか？」

八重樫が聞く。

「重要な書物なんかが置いてある。だから、蔵は立ち入り禁止。じやあ、解散」

話が終わると皆は、それぞれ掃除道具を取りに向っていった。

… … …

… … …

一時間後

「いやゝ、家中ピッカピカだね。この辺で、一息入れようか？」

修史は、お盆にお茶と和菓子を載せて休憩に入る様に促す。

「やったゝ！わあ、美味しそうな和菓子」

「花島、行儀が悪いぞ」

「もう少し遠慮と言うのがないのか？」

保護者的な位置にいる刃鳥と翡葉の注意の声を掛けるが、目の前の和菓子に夢中で聞く耳など持たない。

そんな彼女達のやり取りに笑みが自然と浮かぶ修史。

「そういえば影宮君、八重樫君、秋津君の姿が見えないし休憩に入って貰いたいけど。何処に行っちゃったのかな」

修史が三人分の湯呑をテーブルに置きながら話す。

「じゃ、私が探しに行こうかな」

和菓子を食べ一満足した花島が機嫌良さそうに手を上げながら話す。

「そうだな。花島、頼んだぞ」

お茶を煤っていた刃鳥が花島に三人の事を任せる。
さっきの会話といい、夜行を取締きっているのは彼女（刃鳥）なの
ではという考えが頭に浮かんでしまう修史だった。

第玖話―正統繼承者―

？

その頃の影宮、八重樫、秋津は……………

… … …

「しかし、広い屋敷だな」

「そうだね」

「掃除だけでも、大変だ」

それぞれ一通り感想を述べる三人は、仲良く揃って真面目に掃除を続けていた。

他の者達が和菓子を頬張っているなど知らずに。

「なあ、この部屋まだじゃないか？」

影宮が奥の部屋を指す。

「そう言えば」

「うん」

八重樫と秋津が呟く。

障子に手をかけ開けると、部屋の中央に敷かれた布団に一人の少年が眠っていた。

「閃ちゃん。周りに幾つも結果が……。それに、この子……………」

三人が掃除をしている時に、誤って本棚を倒した時に発見したアルバム。

その開いたページには、幼い頃の墨村家・三兄弟が写った写真。

その写真の下には、ご丁寧に、その時の年齢と名前が綴^{つづ}られていた。自分達の尊敬する人物の過去を少しでも見たいとの好奇心で、三人は、ページを捲^{めく}っていたのだった。

そう回想した中で、目の前で眠っている人物こそが、頭領には持っていないかった資格を持つ“正統継承者”だと分かった。

「確か名前は……………」

「良守」

秋津の代わりに影宮が答える。

「よく覚えてたね。閃ちゃん」

「喧嘩、売ってるのか？」

「これくらい覚えておきなよ」

「えっ！？もしかして、大も覚えてたなの！」

二人揃って頷くのに対し少しショックを受ける秋津。

そんな三人の声に反応したのか。

眠っていた筈の良守が、ゆっくりと目を覚ます。

「あ、起きちゃった」

少しだけ声を落とし、秋津が呟く。

「お前が、大きな声を出すからだろう」

影宮の長い爪が、秋津の額を刺す。

「痛あ！！それな、僕のせいなの？」

「いい加減にしなよ。二人とも！」

最後は八重樫が、まとめる形で場が収まる。

ゆっくりと身体を起こす良守だが。

すたんっ

支える腕の力が弱い為か、すぐに布団へと倒れてしまう。

「“正統継承者”って、こんなに弱いそうな奴が？」

「――閃ちゃん！」

「嘘だよ、冗談。ただ、想像していた奴と違うと思っただけ」

「……………（こくん）」

八重樫も無言だが、影宮と同意見なのか静かに頷く。

ぽてっ

「あ、転んだ」

もう少しで身体が起こせたのだが、またバランスを崩してしまふ。今度は、布団から少し前に出たところ。少しずつだが、確実に此方に近付いていた。

「見ていて、焦れったいな」

手を貸してやりた気持ちだが、周りを拒絶するように張られた結界に阻まれ近付けずにいる三人。ふらつく身体を起こし、ゆっくりとした足取りで三人の前で来るのだが……。

——ぺたんっ

結界を前に座り込む。

ゆっくりと伸びる手に、三人は知らず、知らずの間に身構える。

コン、コン

だが、三人の予想とは裏腹に彼は、ただ結界を数回、手で叩くのみ。当然だが、結界は破れずに硬い音を響かせるだけ。これ以上進むことが出来ない様子から察すると、この結界は本人が造り出したモノでは無いと分かる。

《と、すれば頭領か？》

互いに口に出さずに、沈黙だけが辺りを包み込む。

だが、この状況に余り慣れていないせいなのか。
三人を代表して、影宮が良守に話しかける。

「お前、どっか具合でも悪いのか？」

「……………」

ゆっくりと合わさる眼。

だが、影宮の問いに答えようとしない良守の瞳は、虚ろで三人を見返すだけ。

「閃ちゃん。頭領に知らせた方が良くないかな？」

「ああ。そうだな」

影宮と秋津が後ろを向いた時に、八重樫が呼び止める。

「閃、秀。あれ！」

八重樫が良守を指す。

「……………なんだよ。あれ」

「ねえ！なんか、ヤバくない」

八重樫の声に後ろを振り返ってみると、結界に触れていた部分から小さな波が生じ揺らぐ。

その内に揺らぎは、大きくなり……………。

「指先が……………」

結界を壊す事なく、彼の指先が、手首が結界の外へと進む。
弱々しく自分達に向けられる彼の手に三人は互いに頷き合うと……
……………。

「せえーの！」

ぐい！

彼の手を思いつきり引つ張り、結界の外へと導く。みちび

『うわああー！！』

三人の引つ張る力で、良守を結界から出すまでは良かったのだが、
踏み止まる力まで考えておらず、なだれ込むように倒れてしまう。

「痛え……………」

頭を押さえながら、身体を起こす影宮。

「おい。大丈夫か？」

自分の上へと倒れている良守に声をかける。
軽く身体を揺らせば、まじふた瞼が小さく震えていた。
その様子に“大丈夫”だと胸を撫でおろす。
自分の横に彼を横に寝かせ、二人に声をかける。

「秀、大。大丈夫か？」

「僕は、大丈夫。大は？」

「大丈夫。だけど……………」

起き上がり、改めて後ろを振り向けばヒビ一つない結界が、そのままの形で残されていた。

「なあ。秀、大……………これ」

「僕らじゃ、無理だよ」

「……………（こくん）」

結界を壊さずに、すり抜ける術など自分達には無理な話。

だが、昔、頭領から聞いた話だが、その術を抜けるにも上級レベルの技術が必要だと話していたのを思い出す。

そして、見た目こそ自分達と変わらない者が、その術をやって見せたのだ。

「……………これが“正統継承者”としての力なのか」

さっき、自分が評価したものが、一気に崩れる。

「……………でも、閃」

「何だよ。大」

「この子。……………結界の外に出して、大丈夫だったのかな」

「それは……………」

結界の守りに入れられていたのなら、それは、物凄く都合が悪いじゃないだろうか。

そんなの、考えなくても分かる筈だが。

「そう言えば、俺、どうして、コイツに手を貸したんだ？」

改めて考えると、不思議な事に自分でも分からない。

三人が、それぞれ首を傾げていた時だ。

ぴくっ

眠っていた良守の指先が動く。

「閃、秀。今――」

「ああ」

「うん。その子が、起きるのかも」

畳と着物の擦れる音が、妙に、その部屋だけが大きく聞こえる。とても、ゆっくりとした動作。

だが、目が離せないのはなぜだろうか。

そのくらい、自分達の感覚は麻痺まひしていた。だからだろうか。

三人が呆然としている間に良守は、三人の横を何も言わずに通り過ぎて行く。

「――おい！」

この中で一番早く、自分を取り戻した影宮が良守の腕を掴み振り向

かせる。

だが、彼は何も言わずに“居”るだけ。

「お前、一体――」

「閃、大、秀。休憩だから………――その子!」

影宮達を呼びに来た花島が、良守の存在に気づく。
慌てて駆け寄ろうとした花島だが。

パシッ!

それよりも早く良守が、影宮の手を振りほどく。

今まで反応を見せなかつた、彼の行動に驚きを隠せない。
その間にも、良守は花島とは反対方向へと走って行く。

「えっ? ちょっと!」

「閃! アンタ、何やったのよ!」

「えっ、俺は……」

「そんな事、言っていないで。追いかけてよう。閃ちゃん!」

「早く。二人とも!」

先に動いていた八重樫が二人を呼び、良守を追う。

どたばた、と自分達でも煩いと思ったが、目の前の人物が止まらない限り無理な話だ。

この広い屋敷の中で逃亡する“正統継承者”と鬼ごっこ……。

今から、考えただけで嫌になる。

いくら、普通の人間より体力がある自分だが、それでも疲れない筈がない。

他の者と同じように自分にも限界があるのだから。

「――結」

そんな時だ。

走って逃げる良守の右足に小さな結界が現れ……………突然の事なので今までの勢いを反らす事が出来ずに、その場で派手に転んでしまう。

《うわぁー……………。痛そう。それにしても、容赦ないな》

口には出さないが、同じことを思う三人。

「何やってるの？ お前達」

声のする方へ振り向けば、夜行の頭領と良守の兄・正守という二つの顔を持つ男が食えない笑みを浮かべながら近付いていた。

「頭領。それが……………」

言いにくいそうに事情を説明しようとする影宮を正守は止める。

「大丈夫。別に閃達が悪い訳じゃない」

「――えっ？」

まだ、詳しい事情を話していない筈だが。

それに、もう結論がついていると話す正守。当事者である三人の頭に上には、未だにハテナマークが浮かんでいた。（勿論、花島だが）

「コレが、知らせてくれたからね」

正守が右手を軽く振ると同時に、小さな歪みの空間から現れたのは見慣れない黒い鳥。

——クウウウ……

落ち着いた声で鳥が哭いた。

腕を伸ばせば、その鳥は丁寧に羽を畳み、腕へと身体を休ませる。

《……今度は、何だ（よ）???》

次から次へと展開していく物事に付いていけずにいる……………
…影宮達と花島であった。

第拾夜―羽根の守り―

突然、現れた黒い鳥に呆氣あつけに取られながら様子を見つめる。

最初は正守の力が具現化した式神みたいなモノだと思ったのだが、何か“普段”とは違う気がした。

どちらかと言えば正守の呼び出す黒姫と近い感覚もするのだが……
……黒姫とも違う。

やっぱり、ハッキリとは分からない。

それとも、全く別な力なのだろうか？

「あの、頭領。その鳥は？」

確信は無いのだが、式神と口にせず、見たままの容カタチをしている“鳥”と指す閃に正守が小さく笑う。

「閃の感覚は、良い処まできてるけど。また、後で」

影宮の言いたい事が分かっているのだが、今は説明している時間が無いと言っているように短く答える。

「良守」

結界で、身動きを封じられていた彼の元に近寄るのだが。

――――ゾク！！！！

自分達の周りの空間が少しずつ捻ねじれるていく、イヤな感覚が身体に走る。

反射的に良守から距離を取る影宮達だが、正守は一瞬だけ足を止めただけで、気にする事なく彼に近付く。
彼だって、いや、彼だから、この空間の捻れを敏感に感じている筈なのに臆^{おく}する事なく進む。

『———頭領!!』

4人の声が正守を引き止めるのだが、反対に正守は“心配いらない”と言う様に笑うだけ。

—————パサッ

正守の周りを飛んでいた黒い鳥へと視線を動かす。

「漣影〔レンカ〕。いけるか？」

漣影と呼ばれた黒い鳥は、それに応える様に正守の肩に止まり漆黒の翼を広げる。

漣影の紅い瞳が、ますます燃えるように色濃く染まる。

「——頼む」

正守が呟くと漣影の黒い翼が変化する。

バサッ—————…

激しく羽ばたいた為、翼の羽根が数枚、抜け落ちるが、そのまま落ちる事なく宙に留まる。

くるくる、と回り続ける羽根は、段々と鋭さを増していき、小さな

矢へと変化する。

———スウ

回り続けた矢は、一つの狂いも無く、目標へと矢先を向ける。

「頼む」

ヒュウ、ヒュウ———ヒュウ、ヒュウ

正守の言葉を合図に、宙で止まっていた矢が一斉に放たれる。

パリイン！

無理矢理、結界を壊すと、良守は降り注ぐ、羽根の矢の雨の中を舞う様に回避していく。

瞳には、変わらずに光が宿らずにいる姿は、何処か現実味がなく、触れてしまえば、夢の如く消えてしまごといような頼りない存在に見えた。だけど。

『———頭領！』

影宮達の叫び声が聴こえている筈なのに正守は、皆の声に応えず目の前に居る良守を見つめるだけ。

《———どうして？》

攻撃を仕掛ける意味が解らないと呟く影宮達とは違い花島は、二人の行動を静かに見守っていた。

理由が、どうあれ自分が信じた人だから。

そう、今は信じるしか今の自分には出来ないのだから――――
徐々に攻撃の範囲を広げ始める漣影に対し、良守は追い込まれる形で庭の方へと飛び出す。

夜行一味が見守る中、もう一組の観客が現れる。

「正守！」

異質な気配と騒音に何事かといった様子で、居間から出てくる繁守と修史が慌てて此方に来る。

だが、目の前で起こっている事態に興奮しきった声で怒鳴り散らす。

「一体、何をしておる！」

「正守。お願いだから止めさせて！」

今、来たばかりで状況は（その点では、影宮達も同じだが）掴めていないが、必死に呼び止める。

だが、正守は、答えず二人を見つめているばかりで攻撃の手を緩めない。

黙り込む正守に痺れを切らしたのか繁守が、庭の方へと足を向けた時だ。

「――――むっ！！？？」

今まで問いに答えなかった正守が、繁守を遮るように立ち塞ぐ。

「……………どうしても、邪魔されたくないようじゃな」

「ええ。邪魔されては、こちらの準備が無駄になってしまうので」

正守と繁守が、静かに睨み合う。

ひよい、ひよい————ザッ！

その間にも、良守は漣影と矢に捕まらない様に上へ跳んだりとして逃げ続ける。

ぽんっ

良守の様子を心配そうに見つめる繁守の肩を修史が優しく掴む。

「修史さん」

「…………お義父さん。今は、正守を信じてもらえませんか？
正守は、正守なりの考えが、あるのかも知れません」

「修史さん。」

……………そうじゃな」

「ありがとうございます、お義父さん。」

—————正守！」

修史は、正守の方を見る。

言葉は、口に出さず視線だけを合わせ笑顔で応える。

一度、眼を伏せるした後、目の前の良守を見る。

良守は、矢を避ける事だけに集中している様で、周囲は恐ろしい程に隙が多い。

————クウウウウ！！！！

哭き声と共に、矢の雨が彼に降り注ぐ。

一本、一本が先程の矢と違い“異なるチカラ”が流れ込んでいた事を修史以外の者が何となく察しする。

もちろん、皆、気付いているのだから良守も（たぶん）気付いているだろう。

———ふわあ

直接を避ける為に、一度大きく後ろへと翔ぶ。

「—————“狙え”！」

正守の短い言葉に漣影は、大きく羽ばたかせていた右の翼を一気に散らせる。

突然、片翼^{かたよく}を無くした漣影に、心配そうに見つめる影宮達だが、正守は気にした様子がない。

—————バザッ！！！！

散った筈の漣影の羽根が、正守の命令を聞いた途端に良守の周りを囲み、大量の羽根の雨を降らせる。

凄まじい音と、庭一面に舞う砂埃に視界が濁り様子が分からない。^{すさ}

『良守ー！！』

繁守と修史が庭に駆け出そうとしていた時に「もう少しだけ、待って下さい」と言う正守の言葉に足が止まる。

正守の事を信用してない訳ではない。

だが、繁守と修史は、心配で堪らない様子。そんな心情の中、漸くようや視界が晴れ始め、最初に眼にしたものは。

『…………——良守!』

力無く瞳を閉じ、気を失っている良守の姿に血の気が引く思いがした。

「正守!!」

鋭い眼を向ける繁守だが。

「大丈夫ですよ。おじいさん」

「良守!」

修史の声に釣られ、庭の方へと足を動かして見れば、あれだけの攻撃を受けたにも関わらず外傷らしきものは見付からない。

その事に疑問を持つ繁守は、良守を抱きしめながら不思議そうな表情を見せる。

「俺は、別に良守を攻撃した訳じゃないですよ。おじいさん」

ゆっくりとした歩みで良守の元に近寄り、耳に届いた小さな寝息に安心する。

——クウウ——…………

片翼を失った筈の漣影は、いつの間にか元の双翼となり、正守の肩に翼を休めていた。

「ご苦労さん、漣影。後は、頼めるな」

漣影は、了解とばかりに鳴く。

すう———……

正守から離れ、目指す場所は漣影の羽根が地面へと突き刺さっていた。

それを見届けた後、取り残されていた影宮達に視線を向ける。

「大丈夫。ちゃんと、後から説明するから。今は、良守を部屋の中に休ませた方が先決だ」

コトツ

静かな雰囲気の中、ゆっくりと近付いて来る足音に皆の視線が集まる。

「——頭領。“需音”^{じゅね}が只今、到着したとの事です」

「本当にタイミングが良いな。正直、何時まで持つか解らないところだった。今、直ぐに“需音”を良守の部屋へと呼んでくれ」

「はい」

詳しい理由を聞かず、刃鳥は、すぐに需音呼びに部屋へと戻る。他の者達も良守と共に、彼の部屋へと足を動かすのであった。

第十一夜―儒音―

そして、庭に残っていた漣影は正守の言葉通りに従い静かに羽根を見守っていた。

――パキーン！

庭に深く突き刺さっていた羽根の一つが、硝子ガラスの様に砕け散ってしまふ。

ビシッ

そして、また一つ……別羽根にヒビが入る。

それまで静かに見守っていた漣影だが、漆黒の翼を広げ羽根を守る様に包み込み、静かに羽根の修復へと取り掛かる。

それと同時に地面から青白い光が、浮かぶ。

少しずつ時間が流れていく度に、力強く輝く増していた。



羽根を漣影に任せた正守は、良守を部屋へと寝かせ『需音』と呼ばれている者を待っていた。

そして、その者は刃鳥の後ろから現れる。

待ち構えていた存在に影宮だけではなく、この部屋に居る全員が興

味を持つ。

だが、現れたのは、背丈も見た目も刃鳥と同年代の長い黒髪を高い位置に結んでいる女性だった。

それに、着物を召しているせいなのか少し動きが鈍い印象を覚える。

「頭領。

需音をお連れ致しました」

「ご苦労さん。入ってくれ」

「さあ、中へ」

正守からの返事を聴き刃鳥は需音を部屋の中へと通す。

「只今、戻りました」

凜とした声音だった。

「やあ、悪いね。

帰って来た早々」

「いえ。お気になさらず」

顔色一つ変えないで、会話をする需音と笑顔で話す正守を交互に見ていた花島と閃達は……

《怒ってるのか(な)?》

顔色を窺いながら両者は、密かに同じ事を思っていた。

「需音。

少しは、笑ってみたら、どうだ？」

そんな閃達の様子に気付いた正守が笑いながら需音に話すが、やっぱり無表情のまま。

「私は、笑う事が苦手で。

……………それより話を進ませて頂きませんか？」

そう話す会話を聴いていた花島と閃達は、知らずの内に胸を撫で下ろしていた。

《……………違うのか》

だけど、何で思っている事が分かったんだ？

と、そんな疑問など本人達の顔を見れば誰だって解りそうなのだが……………

そんな事など知る筈もなく4人は、正守と需音の会話を大人しく聞いている事にした。

「……………これを見て、どう思う？」

正守は、良守の襟元を少し崩し、首筋に浮かび上がる痣の様なものを需音に見せる。

「拝見致します」

需音は、懷から小さな巾着袋を取り出す。

そして、その中からは黒淵の虫眼鏡に似たものを手に取り、そのレンズを通して視たり、痣を実際に触ったりと慎重に調べを進める。そして、一通り調べ終わったのだろう。

需音は、調べに使ったレンズを巾着袋の中に入れていたハンカチで丁寧に拭き終わると正守の方に顔を上げる。

「恐らく『呪印』の一部かと思われます」

『――呪印?』

聴き慣れない言葉に正守と刃鳥以外の者が声を揃えて言う。
そんな様子の皆に正守は『後から説明する』と、言ったきり視線を需音に戻す。

「ところで、弟さんの身体の何処かに外傷や麻痺^{マヒ}などは?」

「無い。」

だが、大人しくさせるのに手間取った」

「では――――」

「ああ。」

急いで『文字を解放』してくれ」

需音の言葉を遮り、要求だけを話す。

「承知致しました。」

『文字を解放』致します。

皆さんは、弟さんから離れて下さい」

良く分からない内容だが（正守、刃鳥以外の皆だが）まずは、彼女の言う通り、良守から離れ場所を開ける。

そして、良守が横になっている枕元に立つと、静かに手を合わせる。

第十二夜―“呪印”解除と“呪帰”―

「一体、何が始まるのじゃ？」

繁守が呟くが、それは皆、口には出さないが考えている事は同じだった。

とんっ

需音が畳に手を着いた途端。

――ぶわあ！！！！

掌を中心^{てのひら}に無数の黒い文字が周りを侵食^{しんしょく}する勢いで広がっていく。
その文字の異常な光景に悲鳴が上がる影宮、八重樫、秋津。
そんな彼らに、文字が襲いかかろうと周りを素早く囲むが。

パンツ！

激しさを含ませた様な儒音の手を合わせる音に、自由気ままに動き回っていた文字達に静けさが戻る。

「大丈夫。

身体には害は無いから。

それに、主である儒音が、傍^{そば}に居る』

影宮達を安心させるように刃鳥が話しかける。
その儒音といえど、何かを探す様に、キョロキョロと辺りを見渡す。

そして、儒音が後ろを向き、影宮の元に歩み寄る。

すうー

ゆっくりと、差し出される彼女の手「ゴクッン」と唾を飲み込む。

ぴとっ

「……………えっ？」

影宮を通り過ぎて、彼女の手は、その背後にある壁に手をつく。

そして、指先に摘んだ文字を、スゥー、と後ろに円を描くように持ち上げる。

そのまま何も言わずに良守の元に向かう彼女を影宮が呼び止める。

「おい。」

せめて、一言ぐらい言え」

猫のような目で訴える影宮だが。

「何を？」

と、首を傾げ、逆に聞いてくる。

「お前！」

遊ばれていると思ったのか、前に出ようとした彼を刃鳥が手で制す。

「閃。」

今は、許してやってくれ。

それに、彼女の術は時間が限られている。
儒音、続きを」

「はい」

刃鳥に説得させられ、影宮は儒音の様子を見守る事となる。
先程、指先で捕まえた文字を基礎に、次々と新しい文字を捕まえては、端の方へ、または良守の方へと投げていく。
まるで、決められた配列があるか、無駄の無い動きに知らず、知らずの内に魅せられていく。

———ぱんっ

静かに手を合わせた後に出来た文字は、一つの陣へと姿を変えていた。

「……………これは」

繁守の眩きに、正守が「静かに」と声を出す。

それ以外は、儒音以外の眩きは聞こえない。

その最中、儒音は一度、正守の方へと歩き、懷から『あの羽根』を彼女に渡す。

それを受け取り、良守の一步步前で座り、彼眠っている彼の上に羽根を投げる。

だが、不思議な事に羽根は落ちる事なく、彼女の胸の高さで止まっていた。

「————これより“呪印”解除。

及び“呪帰”の発動を命じます」

良守を軽く、いや、彼の首元に刻まれている呪印を睨みながら、呪式の開始を告げる。

そして、良守を中心に陣となっている文字が、ゆっくりと動きだす。内側の文字は、右回りに、外側の文字は左回りにと規則正しく動く。儒音といえば、何かに祈るように、ただ静かに手を合わせるだけ。

ぶわあ——……

何処から発生したのか、生暖かい風が部屋の中をグルグルと巡る。

ピクッ

僅かだが、良守の右手が動いた。

その様子に、手を合わす事を止め、両手で印を構え直すと、文字達は、彼女の意味を読み取ったのか、別の陣へと物凄いスピードで創り変えていく。

「速く。」

速く、新しい陣に」

少しだけだが、需音の声に焦りが含まれていた。

ぎゅっ、と強く握りしめた印を放す。

両手を広げた彼女の腕には、手首から腕までと、びっしりと動き回っている文字と同じモノが浮かび上がっていた。

「……………う……………ああ」

同時に良守が眼を覚まし、陣から脱け出そうと遅い動きで、その場から脱け出そうと身体を動かす。

一番、近くにいる儒音だが、自分の力を制御する事で精一杯なのか、

動く気配がない。

ふらつく身体を必死に立て直そうと腕に力を入れるが。

「結、結、結、結」

その上から、正守が放った結界で身体を押さえ付ける。

「——せ。

——……なせ。

……離せ！」

正守が張った結界を力任せに壊そうとしているのか、結界が既に崩れかけていた。

「————結！」

正守の結界を補う様に、もう一つの結界が、良守を押さえ付ける。後ろを振り返れば案の定、繁守が右手の印を結び構えていた。

「気を抜くでない。

正守！」

繁守の力強い声を耳にしながら、結界に力を注ぐ。

崩れ掛けていた結界を再度作り直し安定を維持するが、予想以上の良守の力に正直、自分達の力が何処まで通用するのか分かったものではない。

隣にいる祖父に視線を移せば、彼も同じ事を思っているのだろう。額からは、大粒の汗が後から、後からと流れ落ちていた。

今、此処で気を抜けば確実に良守を縛っていたものが無くなってしまふ。

「――離せ!!」

イヤだ、気持ち…………悪い。
出せ…………。

此所から出せ!!」

泣き叫ぶ彼の姿に一瞬、力を弱めようとした繁守を需音が叫ぶ。

「力を抜いては、いけません。

あの姿は、虚像に過ぎない。

そして、あの『声』に騙^{だま}されないで」

淡々と話す需音の言葉に、本当の事なのかと疑問に思う。

どう考えても目の前で苦しんでいる姿は、正真証明、自分の孫。

「……………繁じい」

結界の力を中和しながら良守の腕が、ゆっくりと繁守の方に伸ばされる。

「――――良守!」

名前を呼ばれた途端、今まで歯止めを掛けていた自分自身を捨て、結界を解き、良守に手を伸ばす。

それを、正守の命により影宮達が阻止しようと立ち向かうが、長年の経験には勝てず、あっさりと目の前を通り過ぎてしまう。

「――マズイ!」

結界に力を込めるが。

——————パライーン！

良守を押さえ付けていた結果が、硝子ガラスの様に音を響かせながら粉々に砕け散っていく。

そして、そのまま良守を抱き締めると同時に、今まで大人しく指示に従っていた文字達が目的を失った途端に暴走を始めてしまう。

主である儒音の前にも関わらず、牙を向けようと文字同士が群れを成そうとしていた。

「ねえ、これ。

少しヤバくない？」

花島が、そう呟く。

だが、本音を言えば、少し処ではないのだが。

「うわぁ！」

声のする方に振り向けば、間一髪かんいっぱつで攻撃を避けている影宮達がいた。

「儒音！」

正守の声に小さく頷く。

「皆さん。

動かないで下さいね」

ぽつり、と出された言葉。

交互に、自分の袖の中に手を通した次の瞬間。

——シュツ、シュツ
シュツ、シュツ

速すぎて、一体、何が通り過ぎたのか分からない。

辺りをキョロキョロと見渡していた時に、銀色に輝く普段より大きく長い針が文字達に向けて突き刺さっていた。

それに良く見ると、痙攣けいれんしたように動いている。

文字なのに、痛みがあるのだろうか。

「お前な。

投げる前に、言えよ」

「忠告はした。

それに、力はセーブしてある。

無駄な事を為なければ、当たる事はない」

淡々と話す儒音。

確かに彼女の言うことは正しいのだが。

《危ない奴だな》

またもや、三人とも同じ事を思うのであった。

ともあれ、文字の暴走が止まり、ホッとしたのである。

「大丈夫か。需音？」

正守を始め、夜行メンバーが集まって来る。

『需音!!』

少し危ない奴だろうが、影宮達にとっては、大切な仲間である。
その一方で、修史は、良守の元へと急ぐ。

「よ、良守!!」

虚ろな瞳のまま、二人の姿を見上げて良守だが、そのまま糸が切れ
てしまったかの様に気を失ってしまう。

困惑する繁守に近づく正守を睨み付ける。

「おじさ——」

「良守に近づくではない!!」

繁守は、正守の話を最後聞こうとせずに良守を強制的に部屋から連
れ出してしまう。

その後ろ姿を見ながら、今後の事を正守に聞く刃鳥。

「そうだな。」

「……暫くは、動けないな」

正守は、腕を組ながら話す。

「でも予想外だったのは、おじいさんの行動だな。」

俺は、手つきり、父さんの方が気がかりだったけど………要らな
い心配みたいだ」

笑いながら正守は、修史の方を振り向く。

「大丈夫。」

僕は、自分の子を信じてるだけだから、心配は為てないよ。

それより、今の現状を説明してくれないかな正守？」

今の状況を理解しない限り、すっきりした気持ちには為れない。それに、少しでも自分の持っている“知識”が役に立つ様ならばと、考えているのだ。

「全く。」

父さんには敵わないよ」

そんな修史の考え事など、お見通しなのだろう。

苦笑いをする正守であった。

そして、この術式に貢献した需音は……………。

ひよい、ひよい――

シュツ

文字の列を糸の様に宙に投げると、一列ずつ自分の身体の中に戻している姿があった。

それを見ていた影宮達が手伝おうと声を掛ける。

「必要ない」

きっぱりと、断わられる。

「でも、何か手伝う事が……」

穩便に事を進めようと、今度は秋津が話しかける。

「下手に触らない方が良いわ。」

喰われると、何も残らないから」

と、物騒な事を口にする彼女の言葉に慌てて手を引っ込める。

「お前は、平気なのかよ？」

不器用な伝え方だが、影宮が話しかける。

「私とコレは、契約を結んでいの。」

だから、私が“死なない”限り、勝手な行動を移せない」

「でも、それってヘタをしたら、お前がヤバいんじゃないのか？」

「心配は、要らないわ」

どうやら意志を持たない様な扱いの文字が生きている事に驚きもしたが、それを意とも簡単に扱う儒音の姿に疑問に思う。

「契約って言っても、結局は『血』を対価に差し出すだけ」

「血の対価？」

「後で、詳しく説明――」

突然、動きが止まる。

「どうしたの。儒音？」

秋津が話しかける。

「お前は、違うな。

……………68章、4行節。

——其所か」

再び、針を文字に向けて放つ。

ぴとっ

針に刺さっていた文字が脱け出そうと、全身を揺らす。

「儒音……………」

お前、まさか」

「影宮さん……………だったかしら」

「閃でいい。

それより」

「察しが良いのね。

君の推測通り、私は、己れの身に宿る全ての章（文字）を暗記しているの。

一度、解放したモノを順番通りに文字を収めなければ、私の中で混乱が起きてしまう。

それに、次に文字を解放した時に“術”のバランスが崩れ、リバンドが生じやすくなってしまう」

スルスル、と文字を手に取り見つめながら話す。

「じゃあ、この数を……

」

「解放したのが、これだけで助かったわ。

まだ、全てを解放している訳じゃないから、手間も取らない。

……………それに」

「もう、いい。

俺が悪かった」

と、謝りだす。

一方、彼女は、その彼の言葉の意味が解らず、首を傾げる姿は、今さっきの物騒な呪式を使う同一人物なのかと疑ってしまう程“ぽけっ”とした表情の彼女であった。

第十三夜―呪印の特性と彼女の素顔―

「―――需音」

「頭領」

「身体の方は？」

「特に、問題ありません」

先程、針で捕縛した文字を回収しながら返事をする。

「正守。」

立ち話も何だし。

居間の方で、ゆっくりとお茶を飲みながら説明して貰えるかな？」

少しでも場の雰囲気と和まそうと修史に、その場の皆は口には出さなかったが、本当に心から感謝するのであった。

… … … … …

そして、場所を墨村家の居間へと移し、美味しく煎れられた、お茶を前に各々が手を伸ばしす。

お茶を近付ければ、茶独特の香りが、疲れきっていた心を癒し、一口飲めば、少し甘さが引いた味に身体が癒される。

煎れ方と、お茶をいれる人の心遣い一つで、普段から飲んでいるも

のに、こんな変化があるのかと驚かされる。

そんな和やかな雰囲気の中、此方に近づく足音の存在に気付く。

「頭領。」

ただ今、監視者から報告が」

足音の正体は、いつの間にか姿を消した翡翠だった。

どうやら、残りの夜行メンバーと連絡を取り合っていたらしい。

「で、報告は？」

「はい。」

烏森の力ですが……………。

時折、視せる力の波動が極端だという事です」

「極端？」

……………それは、いつ頃の話だ？」

「報告によると、大体、一週間程から」

「……………一週間」

それは、良守が烏森で何者かと出逢い、彼の変調を墨村家から連絡を貰った時間と丁度重なる。

その事を頭の隅すみに置きながら、報告を聞く。

「それで、原因は？」

「今の処、まだ掴めてない様です」

やっぱり。

解りきっていたが、こうも手掛かりが無いとは、さい先が悪い。昔から、烏森という土地は得体の知れないモノ。

《……………一体、烏森に何が起きている？》

悩んでいても彼の答えにふさわしいモノなど、見付かる事など無い。

「……………正守」

黙り込む彼に、修史が小さな声で話しかける。

それに、今聞いた話が重要なだけに話に割込む事が出来なかったのだが。

「焦って、答えを見付ける事なんて無いと思うよ」

「……………父さん」

「それに、良く周りを見てみて」

ぐるり、と見渡せば刃鳥から始まり、皆、自分を慕う者の眼があった。

「迷いと焦りは、適切な判断力を誤ってしまう。

……………こんな時だから、休む事も重要だと思っんだ」

確かに修史の言うことは、一利ある。

いざ、修羅場を迎えようにも疲弊ひへいしきった身体は邪魔なものばかりか、悪くなれば、状況も危うくなってしまう。

そういう意味で、修史は「休め」と話しているのだ。

「まったく、本当に敵わないよ」

そう言いながらも、嬉しそうに笑う。

「だけど、目の前の事から出来事から片付けないとな」

一度、溜め息を吐いた後、正守は“今の状況”を、この場に居る皆に語り出すのだった。



「それじゃ、本当の良守は『眠っている状態』。
今の良守は『暗示によって創られた人格』って事……………で、合
ってるかな?」

修史は、飲んでいた手を止め、聞いたばかりの話を確認の為に、も
う一度口にした。

「まあ、そう言う事かな」

同じ様に手を止めていたが正守だが、話を聞き終ると同時に再び、
お茶を味わっていた。

「あの頭領。一ついいですか?」

「どうした。閃?」

「具体的に『呪印』って、何ですか？」

ずっと、疑問に思っていた。

それを聞くチャンスだと思い、三人組（もちろん、秋津、八重樫の事）の代表として彼が正守に尋ねる。

「そうだな……………」。

簡単に言ってしまうえば『呪印』とは、相手を拘束したり、位置を把^は握^{あく}する為の目印の様なものだな」

『目印ですか』

正守の言葉を、そのまま口にする三人。

あまりにも、簡潔過ぎる説明に呆けている様な気がする。

「でも、少し、おかしくないですか？」

今の説明なら『呪印』で、苦しまなくても済む筈だ。

だが、今の彼の……………良守の反応を見る限りでは、ちょっと違う気がするのだ。

「そう、秀の言う通り。」

本来の呪印だけの効力とは、違う働きが在るとみていい」

そう言いながら、正守は視線を儒音へと向る。

それを受け取った儒音が軽く頷き、彼の後を引き継ぐ様に説明へと入る。

「通常能力では、確かに生じないモノがある。」

だけど『カタチ』は違えでも、確かに呪印の一部だと考えても良い。
……頭領の弟さんに仕掛けられた呪印は、独自に開発され、他の
呪式と……――」

少し間を置く。

彼女自身、どう説明すれば解りやすいのか悩んでいる様子だ。

「……ちょっとした『トラブル』が起きてしまったが……」

私の“呪封師”としての陣も、あっさりと破られてしまった」

此処で話している、ちょっとしたトラブル……

繁守の乱入の事だろうか。

まあ、そんな事はさておき。

又しても、理解できない言葉が出てきた。
また

「儒音さん。

『呪封師』って、何ですか？」

今度は、身を乗り出す様に、八重樫が聴いてくる。

隣にいる影宮も秋津も同じ様に、大きく頷いていた。

「“呪封師”とは、私の様に『呪印』に縛られた人に刻まれた“印”
を消す者を指しているのよ」

「じゃあ、あれが……」

良守に刻まれていた紋章の様な痣を影宮が指せば、儒音が軽く頷い
く。

「でも、その術が効かないのなら……」

「落胆するのは早いわ。」

まだ、何も出来ないとは限らない」

力強く話す儒音の言葉に皆が、一斉に顔を上げる。

——そうだ。

まだ何も終わっていない。

まだ、何も取り返しが着かない事は何一つ起きていないのだから。それからというものの、彼女から色々と説明され、一つ、一つ蓄積されていく知識に真剣に向き合う影宮、八重樫、秋津。その度に、同じ動作で“うん、うん”と頷く仕草が面白く、大人組みは必死になって笑いを堪えていたのは、また別の話で。

「需音。」

“陣”は、いつ使える？」

茶を飲みながら正守が尋ねる。

「……………今日は無理です」

。

たっぷりと、間を置いた処で答える。

「それに対象者が、無理に陣を抜けしまったので“文字”達が、まだ騒いだままで、使い物になりません」

そう言いながら自分の腕の袖を捲ると白い腕だったが、今は少し紅く染まっていた。

「じゃ、実行は明日以降か」

「ご当主の方は、どうしますか？」

「大丈夫。

ちゃんと、考えがある」

爽やかに答える正守だが。

一体、何を考えているのだろうか？

「花島」

「えっ、はい」

突然、呼ばれた事に声が裏返る。

「苞調「ホウカ」を連れて来てくれないか？」

「…………苞調を？」

花島は、その名を呟きながら何かを考えていたが。

「————あっ！」

周囲の反応を気にせず、声を上げるが、一番驚いているのは自分自身の様であった。

「本気ですね？」

念の為の確認をする。

「もちろん。

ここで、冗談言っても仕方無いからね」

その言葉に、ニヤリと花島。

だが、正守も同じ様な表情。

《良くない事が、絶対に起きる！》

声には出さなかったが皆、同じ事を思う。

ただし……………。

「美味しい」

竹楊枝に刺さっている薄紅色の牡丹ぼたんを型どった和菓子を一口、運んだ処であった。

マイペースで、和菓子と、お茶を堪能する姿に、さっきまでの緊迫感が嘘のようである。

「まあ、確かに、美味しいけどね」

と、呟きながら小さな笑みを浮かべる。

「修史さん。

お茶と和菓子、ご馳走さまでした」

「あつ、うんうん。

ちゃんとした、おもてなしが出来なくって、ゴメンね」

「いいえ。

本当に、有り難うございました。
では、頭領」

「ああ。頼む」

その言葉に、軽く頷く。

「では、お邪魔しました」

楽しそうに手を振りながら、挨拶を終えた彼女は、さっさと夜行に
戻ってしまう。

正守に頼まれた“ある物”を連れて来る為に。

「そういえば……………」。

なあ……………お前、まだ食うのかよ？」

修史から新しい和菓子を手にしていた彼女の姿に、影宮は小さな溜
め息を吐く。

「別に問題は無いわ。
食べたい？」

と、和菓子を影宮の前に出す。

「いや、いい。
お前が食べろ」

影宮の言葉で、止まっていた竹楊枝が、再び動く。
その様子にピクツ、と形の良い眉毛が釣り上がる。

「大丈夫。」

彼女は、根っからの甘党だから。
特に、呪式を解放した後はね」

説明しながらも、彼女の前には、四季の花の形を彩った和菓子が、
次々に並んでいく。
もちろん、用意したのは、修史である。

「それで、私に聞きたい事は？」

二個目の和菓子を食べ終った儒音が、影宮を見る。

「ああ。」

呪式が始まる前に、何か言ってたよな？」

「呪印の解放」

「違う。」

「……………その後だ」

「……………“呪帰”」

「それだ。一体……………」

「言葉通りの意味」

彼女の手が、また次の和菓子へと伸びる。
今度は、微妙に色を変えた桜を型どったものを均等に竹楊枝で刻んでいく。

「じゃあ、それは呪印を刻んだモノの手掛かりを探っていたのか？」

「良い線と………言いたいけど、少し違う。」

“呪帰”は、掛けられた呪印を一度紐解き、再発動した時を狙って、その“呪”を逆手に取るもの。

そのまま相手に返す事よ」

早い話が、良守の印を刻んだモノに、そのままの“呪”が飛んでいくのだと説明しているのだ。

「それって、物凄く危険じゃない？」

秋津が、恐る恐るといった様に話に加わる。

「問題ないわ」

ごくんと後、一口だった和菓子を飲み込む。

ずずっ

温かい、お茶を一口。

「それ相応の対価が、必要だけど」

「対価？」

「血よ。」

私の軀に宿る“文字”達は才能有無では、働く事はない。ただ、その血が、美味しいと思うモノだけに従う」

彼女の言葉に、三人の顔が引きつる。

「これは、契約を結ぶ獣にも適応する事。
別に珍しいモノでは、無いわ」

「でも、一瞬だけ、暴走した様に見えたけど？」

控え目で話す八重樫。

確かに、彼の言う通りの事実がある。
その話だと、矛盾が生じるのだが。

「話を聞いて無かったの？」

今度は、見た目にも涼しげな水色の寒天が飾られた和菓子を手に取る。

「“文字”は、血が上質であれば、在るほどに、その血を求める。
たぶん、弟君の血に反応したのかしら？」

「良守の……………血」

不安で堪らないといった様子の修史。

「ご安心下さい。」

“文字”達は、私の命には“必ず”従ってもうように契約を結んで
おります。

万が一、他のモノの血を頂くのであれば……………」

ごくんっ

三人が固唾を無理やり飲み込む。

「消えて頂きます。」

いえ、彼らが崩壊すると説明するのが正確な答えですね」

「でも、何故……………」

「一度、契約を結べば、その血しか味わう事が出来なくなる。

早く言えば、他の血は“文字”には毒と同じ事が言える。

だから、文字の暴走を止めなければ、文字は消滅してしまうし、私の“陣”は完成しないままに消滅してしまう」

「なんとか、大変だね」

秋津が呟く。

妖混じりである自分は、見た目が化物ぽく見られる事もあり、ヒ
との中では窮屈きゆうくつな想いを抱いていた。

だが、目の前に居る彼女は、それ以上の苦勞が……………。

「同情は要らないわ。」

これは、私が“自分自身”で“決めた”理ことわりだから」

秋津の言葉を遮るように話す。

「ご、ごめん。」

そんなつもりじゃ……………」

「ふふ。優しいのね」

ぱくっ

満足と言いたげな笑みに、秋津が、ほっ、と撫で下ろす。

「お前………………。これ、全部、食べたのかよ」

影宮の言葉に視線をテーブルへと戻す秋津と八重樫。

数分前には、沢山あった和菓子の方は綺麗に消えていた。

「気持ち悪くないか？」

恐る恐る聞く影宮だが。

「平気」

と、短い返事で平然と話す。

今日、色々な意味で儒音の性格が分かっていたような三人であった。

第十四夜―想いと過去―

— X X X —

——幼い君と交した短い言葉。

ただ、その言葉だけが、いつまでも僕の心に引っかかっていた。

——“約束”——

そう言って、差し出した小さな小指。

絡めるように結び、上下に振りながら歌った童歌わらべうたが頭の中に響いている。

指きりげんま

嘘ついたら 針千本のーます

“指きった”

——“約束”だから

▼
「ただいまー！」

玄関の扉を小学校から帰って来た利守が、玄関を開けると、見慣れない複数の靴に一瞬足を止める。
そうしている内に修史が出迎えに来ていた。

「お帰りなさい。利守」

「ただいま、お父さん。
お客さん？」

見慣れない靴を指しながら尋ねる。
「“烏森”の件事だね。
それに今、正守が帰って来てるんだ」

「正兄が？」

「おやつは、居間の方にあるからランドセルを部屋に置いて来ね。
その前に、ちゃんと手を洗って」

「うん。分かった」

そして、修史の言いつけ通りに済ませ、居間の方へと足を運ぶ。

襖ふすまを開けた途端。

「おつかれッス！」

と、揃う声。

しかも、よく見てみれば、さっきより、少し人数が増えている。
その為、今は、テーブルを二つ出し、繋げて座れる様になっていた。
あまりにも、人数の多さに違和感を覚える。

《……………落ち着かない》

「こ、こんにちは。」

そして、お帰り。

正兄」

そんな事を頭の隅で想いながら利守は、夜行の人々に挨拶を交わす。

「ただいま、利守。」

ごめんな。

急に、こんな大勢で、ビックリさせたな」

口に出さなくても正守には、利守の考え事はお見通しだったようだ。

「大丈夫だよ」

そう言いながら利守は、誰かを探す様に辺りをキョロキョロと見渡す。

口には出さなくても、利守の様子を見れば、誰を追っているのかが、瞬時に分かった。皆

そんな様子を見ながら修史が、利守に声をかける。

「良守なら部屋の方で、休んでいるから心配いらないよ。
利守」

「……………そっか。

うん、分かった。

僕、友達の家に行つて来ます！」

「気をつけてね」

元気に出かけていく利守の後ろ姿に、漂^{ただよ}い始めていた暗い雰囲気
が吹き飛んでいく感覚がした。
そのお陰で、少しだけ心が軽い。

「……………利守のお陰だな」

「」「」「頭領？」「」「」

「正守？」

皆が見つめる中、正守の顔は何処か吹っきた様な印象。

「需音。

明日には“文字”が、使えたな？」

正守が需音に改めて確認を取る。

「はい。

可能だと思います」

需音の答えに頷く。

「じゃ、これから話す事を皆に聞いてもらおうかな」

そう言う正守の瞳には力強い光が戻っていた。

… … … … …

人気の無い奥の部屋には、意識を失っている良守と静かに見守る繁守が居た。

「……………何があろうと儂が」

ゆっくりと立ち上がり、そのまま部屋から出て行こうとしたが、印を構え多重結界を張る。

そして、後ろをチラッと見ると、今度こそ部屋から立ち去るのであった。

… … … … …

居間に集まっているメンバーに明日の事を説明する正守の言葉に、皆は、それぞれ力強く頷く。

「それまで各自、身体を休めてくれ」

彼の言葉が言い終わると同時にメンバーは、解散となり、明日へ備え、早々に休みに入っていた。

そんな皆の姿を見ていた正守だが、最後の一人が居間から出て行くのを確認すると、ようやく自分も腰を上げる。

途中で父である修史に「無理は、駄目だからね」と、最後まで彼を心配させてしまうのだった。

長く離れていても変わらない心配性の父の姿を懐かしく感じながら想うのは、少し歳の離れた弟の事。

そんな事を想っていると、自室へと辿り着いていた。

幼い頃は、自分の何気無い態度に傷付けたかも知れない。

まあ、そのツケが回ってきてしまったのか、自分に対し弟は、ひねくれた態度を取るようになってしまった。

当たり前の反応だと言ってしまうえば、それで終りだが……………

…。初めは、その程度だった。

アイツは、俺とは違うのだから“俺”という存在は必要ないのだと想い家出たのだが、それは自分の思い違いだという事に気付かされる。

本当に必要だと感じていたのは、自分の方だと。

歪んでいく自分の心に溜っていく闇が、少しずつ薄れて……………

：いや、厚く覆ってしまった雲を取り去ってくれる様な晴々（はればれ）とした気持ちだ。

ただ、アイツの声に耳を傾けているだけのだけなのに。

いつも、正常への道へと引き戻す存在^{モノ}。

そして、視線は右の掌^{てのひら}へと移る。

そこには“何も”刻まれていない“普通”の手。

自分とは逆に良守の掌に深く刻まれた『方印』が、今も居座り続けている。

今は然程、気にも留める事も無いのだが、この行為が酷く弟を傷付けていた事も知っていた。

それでも無視し続け、歪みかけていた昔の自分。

だが、それすら今は馬鹿らしくなる。

そういえば……………。

あれは、まだ良守が小学校の低学年の時だったか。

修行の息抜きとして縁側で寝転がっていた自分に、いつの間にか近寄って来ていた良守。

その時、自分は見向きもおきず、ただ掌を見ているだけだった。

『兄ちゃん』

不意に呼ばれた。

このまま無視しようか迷ったのだが、何故か聞き流す事が出来ず、振り向く。

『起きて』

何が楽しいのやら。

にこにこ、と笑う良守に言われた通りに起きる。

『手を出して』

無表情な自分とは違い、コロコロと変わる弟。

正直、疲れないのかと聞きそうになる。

キュッ、キュッ

想いに耽っていたら、何やら掌が擦りたい。

掌に視線を戻そうとした時だ。

『これで、一緒。
お揃い！』

自分の掌には、不格好な『方印』があった。
もう一度、良守に目を向ければ、嬉しそうな照れくさそうな笑顔で
見上げていた。

『———良守！』

『父さん？』

なんだろう……………」

正守の返事も聞かず、その場から立ち去ってしまう。
そして、残された彼は、再び掌へと。

『……………」

少しだけ広がっていた歪みが薄れていく感じがした。
そして、家の中からは、賑やかな笑い声をする。
ちよつと遅れて、繁守と良守の怒鳴り声が聞こえた。
たぶん、父さんに買って来てもらったケーキでも食べようとしたの
だろうか。
でも……………」

『嫌な気分じゃない』

今の自分が感じる素直な気持ち。

「でも、その後が大変だったな」

回想を終えた正守が、呟く。

その時に握られていたマジックが油性だったのだ。

お陰で、手を洗うのに苦労したが、当時の良守が水性と油性の違いが解る筈はない。

その前に、この二種類を知っているのが疑問だが。

「何か、良いことでも在りましたか？」

視線を上げれば、自分の片腕として動く刃鳥が居た。

「いや。少しだけ、昔の事が思い出していただけた」

と、短く答える。

「それに、なんで、そう思う？」

さっきの彼女の言葉の意味を尋ねる。

「お気づきではない様子なので、お話します。

居間にいた時よりも、もっと柔らかい表情ですよ」

彼女の言葉に少しだけ驚く。

「良守君ですね？」

問掛けている口調なのに、その響きは確信に近い。

「さあ、どうかな」

流すような答え方をしたが、この優秀な部下の事だ。

全て、お見通しだろう

たしかに、あの頃に感じた息苦しさは無いと言えは嘘になる。

だけど、確実に薄れていつているもの事実。

最近、アイツ（良守）に会えば自分が、嫌でも歪んでいる事に気付かされていたが、それを正常に戻してくれる存在になっていた。

どんなに歪もうが、アイツの笑顔や声を聴いただけなのに不思議な存在だ。

本当に我が弟ながら不思議な魅力の持ち主だと心の中で呟くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4713j/>

月からの警告

2011年10月6日16時38分発行